
霊能作家・黒瀬圓の事件簿、第一話、維高大明神の巻

平維茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊能作家・黒瀬圓の事件簿、第一話、維高大明神の巻

【Nコード】

N6742D

【作者名】

平維茂

【あらすじ】

黒瀬圓は表向きは作家であるが、神仏一体修法を修得した霊能者で隠れ行者であった。二月初旬の或る日の朝、たまき出版の吉川から怪奇現象についての相談の電話が架かってきた。これが四国山中の村から始まり、京都に至る平家怨霊封じ、源氏の怨霊との戦いの旅の始まりとなった。

その1

二月初旬の或る日の朝、庭には昨日降った雪が薄っすら残っていた。

午前八時過ぎくろせまどか黒瀬圓の書斎の電話が鳴った。

「黒瀬先生、たまき出版の吉川です。こんな早くに申し訳ありません」

それは編集者の吉川からの電話だった。

「ああ、吉川君か。お早う。こんな早くから原稿の催促かね。原稿は八割方

出来上がっているが、残りは今日中に何とか書き終える予定でいる。何分、

昨日は仲間と雪見酒だったもので」

「黒瀬先生。実は原稿の件ではないのです」

「それではまた、相談ごとかね」

「実は・・・、そうなんです」

吉川がそう言うのと黒瀬は咄嗟に机の上に置いてあった菩提樹の念珠を首

に掛けた。黒瀬圓は表向きミステリー小説などを書いている作家であるが、

那智熊野や四国の山中で難行苦行の末に神仏一体修法を修得した修験道の

行者でもあった。それも霊能者としてはメディアなどには一切出る事の

無い隠れ行者である。

「私の大学の友人で東和テレビのチーフディレクターなんですが、彼からの相談なんです」

「東和テレビのチーフディレクターが？」

「そうです。最近、彼の担当で心霊特集の企画を組んだとの事で・・・」

「心霊特集？ また、霊障かね」

「はい・・・」

吉川は申し訳なさそうに言った。

「困ったもんだね。興味半分であの手の特集を組むから、霊障とかの問題が出て来るんだよ」

黒瀬は半分迷惑そうに吉川に言った。

「黒瀬先生。なんとか今回も相談に乗って頂きたいのですが」

「では、一時間後にもう一度電話を頼む」

「分かりました。それでは一時間後にまた電話させて頂きます」

黒瀬は電話を切った後、奥の部屋に有る祭壇の前に行き、自らを霊障から守る護身法を行った。いくら修行を重ねた行者と言へども油断す

れば、相談者の話を聞くだけで自からも強い霊障を受ける事が有り、場合によっては七転八倒の苦しみを味わう事になり、罷り間違えば命の危険すら有る。首を吊った者の霊障の場合は自らの首が締め付けられ、呼吸が苦しくなる。焼身自殺者の霊障は体全体が焼けるような熱さに襲われ、意識が混濁した状態に陥る。また、水死者の場合は立所に呼吸困難になり、心臓の動悸が激しくなるのであった。正に命懸けである。それ故、自らを守る為には日々の神仏への勤めと護身法は欠かす事が出来ない。

一時間後に再び、編集者の吉川から電話が有った。

「黒瀬先生。吉川です。宜しいですか」

「ああ、いいよ。それでは詳しく話を聞こうか」

「私の友人の話によりますと、先月の初めに心霊現象の取材で霊能者の山口千代先生とスタッフ三人を連れて四国の山中に取材に行ったとの事です。すると取材を始めた途端にスタッフ三人の様子がおかしくなったので急遽取材は取り止め、東京に戻ってきたとの事です。しかし、戻ってから一カ月近くも経つのにその三人の症状が一向に良くならないのです」

「その山口千代とか言う霊能者も一緒に行っていたのだろう。霊能者がわざわざ付いていて、何て体たらくな事かね。その霊能者は護身法も除霊も出来なかったのかね」

「そこは、よく分かりません」

「何の為に放送局はその霊能者に高い出演料を払っているのかね。それで吉川君の友人は如何だったのかね」

「私の友人は取材を始めた当初は一次的に変になりましたが、彼の場合は直ぐに正常に戻ったと言っていました」

「うっん……。分からないな」

「先生。私の友人に一度会って詳しく話を聞いて頂けませんか」

「吉川君。君も知っているように私は霊能者とか心霊評論家としては一切メディアには出ないから。それで良ければ話を聞いても良いが」

「それは友人によく言っております。是非、お願いします」

「そうか。それでは、早い方がいいだろ」

「先生。申し訳有りませんが、明日でも良いですか」

「明日か……。では明日の午後一時に新宿のプレジデントホテルのカフェテリアではどうかね。その時に原稿も持って行くよ。出来上がっていればの話だが」

「それでは、先生。宜しくお願いします。出来れば原稿も一緒に・・」

黒瀬は今回の吉川からの相談について、余り良い印象を受けなかった。

心霊番組の特集で山口何某の霊能者が付いていながら、スタッフが
霊障

を受け、その霊障が一ヶ月近くも経つのに取り除く事が出来ない

なる

と、単なる死霊ではないと思い、かなり厄介な事に成るのではと感じた。

その2

翌日、約束の時間に黒瀬がプレジデントホテルのカフェテリアに行くと吉川とその友人は既に来て待っていた。

「先生。こちらです」

窓辺の席から吉川が迎えに出てきた。

「やあ」

「先生。ご多忙のところ申し訳ありません」

「別に気にしなくてもいいよ。吉川君の頼みだし、それに何時もの事だから」

黒瀬と吉川は友人の待つ席に行った。

「先生。彼が私の大学の時の友人の武田です。ゼミが一緒に、卒業後も時々会って、よく飲みに行ったりもしています」

「武田です。宜しくお願いします」

「黒瀬です。こちらこそ」

「黒瀬先生。今回はご多忙のところ、ご相談にのって頂けるとの事で感謝いたします」

武田は疲れた様な顔をしていた。

「吉川君の頼みなので、断る訳にもいかないし。なあ、吉川君」

「は、はい。有難うございます」

吉川が恐縮した。

「吉川君から事情は聞いて貰っているとは思いますが、私の本業は家で、霊能者や心霊評論家などではないから。心霊現象などの番組には一切出ないし、私の名前を出されても困る。その所はよく承知しておいて下さい」

「その事は吉川から聞いています。黒瀬先生には一切ご迷惑をお掛け致しません」

「それなら良い。では状況を詳しく聞かせてもらいましょう」

武田が話し始めた。

「今回、心霊現象の特番を予定していました。それで、情報をネットで公募したところ多くの情報が放送局に寄せられてきました。中には眉唾のような話も多く有りましたが、その中で十件程信憑性が有るものをピックアップし、企画を組み、取材を始めました」

「その内の一件が今回の問題のところだね」

黒瀬が武田に言った。

「そうです」

「霊能者の何とか言う先生も一緒だったのだろ」

「はい。今回の特番は山口千代先生に監修と出演をお願いしていました」

「それでは、君たちはその山口先生に、事前に取材の場所が安全かどうかの判断をして貰うとか、霊障を受けない護身法をして貰うとか、

護符

を貰うとかの指導は受けなかったのかね」

「護符は一枚頂きました。料金は別に請求されましたけど。それは取材車

の中に張っておきました」

「それでは駄目だよ！ 護符は各自が持たないことには。それに霊障を受

けない為の護身法は欠かしちゃ絶対に駄目だ！死霊や怨霊には力の強いもの、

弱いものなど千差万別だ。霊障にしても霊の持つ力の強さや弱さで違ってくる。

その山口先生が、どれ程力の有る霊能者か祈祷師かは知らないが、事前に行く

場所の霊障の強さを察知するのはその先生の役割だ。その山口先生の持つ力

より霊の力が強ければ、最初からその場所は避けるべきだよ。その判定も出

来ていない。それに、メディアの興味半分の取材などは特に霊の反発を招き易

い。単なる死霊、例えば自殺や事故死の場合は、祈祷をして成仏さ

せてやれば

それで事は治まる。霊障も取り除ける。しかしだな、怨霊となると話はまた違っ

てくる。強い弱いはあるが、怨霊は怨霊なりの考え、執念を持ており、興味半分

の者が領域に入ってきて来ると、容赦なく立ち向かってくる。こちらに力が無ければ、

逆に命まで取られる事にも為りかねない」

「そうでしたか」

武田の顔が蒼白になった。

「霊能者や祈祷師もメディアにチャホヤされて生活が派手になれば欲も色気

も出てきて修行が疎かになる。その山口先生とやらも、今は自分を守る事だ

けで精一杯なのだろう。私から言わせれば、怠慢としか言いようがない。

プロの霊能者として看板を出しているなら、それなりの事をしなければ、

周りを危険に落とし入れるだけだ。しかし、武田君の場合は最初だけ霊障

を受けただけで助かったようだが」

「はい。今の先生のお話をお伺いしていて、思い当たるところがあります。

実は私は以前に母から貰ったお守りと言つか護符と言つかを何時も持っています」

「そうか。それで君は助かったんだ」

「私の実家は自分で言うのはなんですが、千葉でも古くから続く地主の家系です。

神棚と仏壇は昔から有り、庭にはお稲荷様の外宮もあります。代々、信仰深く、

祖父母と両親も毎朝丁寧にお奉りをしています」

「やはりそうか。それで君の場合は守護されたんだ。武田君の持っている護符

はお稲荷様の護符ではないかと思うが。霊障が始まったので、おそらく稲荷の眷属が守護する為に君を取り囲んだのだろう」

「そうでしたか。今もそれは持っています。何でしたら、先生にお見せしましょうか」

「いや。それは止めとこう。もしそれが秘符の場合、人に見せて効力が無くなるといけないから。無闇やたらと人には見せない方が良く。これから大事な肌に肌身離さず持っていないさい」

「はい。分かりました」

「それと、実家に帰る事があれば、必ず神棚、稲荷の外宮、仏壇に今回ご守護

頂いた事に感謝をしなさい。これからも守って貰えるよ」

「はい。先生、そうさせて頂きます」

「おそらく、靈障が始まり、稲荷の眷属が君を取り囲んだ時は、その山口なん

とかと言う先生は怖くて震え出したんじゃないかね」

「いやあ。震えかどうかは分かりませんが、顔が真っ青になっていました」

「そうだろう。稲荷の眷属が本気になると凄まじいからな」

黒瀬が納得したように言った。

「それで、その山口先生から君の三人のスタッフには、その後フォロ―は有ったのかね」

「山口先生の話では、あれから毎日自宅の祭壇で祈祷をして下されているとかで、

三・七、二十一日は必要とおっしゃられていました。しかし、もう既に二十一日も

過ぎていますが、スタッフの様子が一向に良くなる気配が有りません。それで今回、

思い切って吉川に相談した次第です」

「その山口先生、祈祷もしていなんじゃないかね。最初から、太刀打ち出来ない靈障

なのだろう。迂闊に祈祷をしようものなら自分が靈障を受けるので諦めてしまってい

るのではと思うが。その後、その先生には連絡したのかね」

「連絡はしましたが、助手の方の話では多忙との事で、直接ご本人とは話が出来ていません」

「逃げているね、その先生。ところで、どのような症状と言つか靈障かね」

「私が受けた症状と全く同じなのですが、最初に目が痛くなりました。度の強い眼鏡を

長らく掛けているような感じです。その次に頭、特に前頭葉が痛くなり、その後

後頭部から首筋に痛みが出てきて、吐き気がしました」

黒瀬は武田から現象を聞いて暫く考えていた。

「そうか……。その現象はおそらくは怨霊によるものだな。それも、かなり昔から

居る強い怨霊だ。相当に手強い相手の様だな」

「先生。どうすれば良いでしょうか。早く三人の靈障を取り除いてやりたいのですが」

黒瀬は困った表情をした、そして思い出したように吉川に言った。

「あ！その前に吉川君。君にこの護符を渡しておくので、肌身離さず持っていてくれ。

と言うのは、君は今回の話の仲介者になる。場合によっては仲介者に靈障が出てくる

事がよく有る。この中で護符を持っていないのは君だけだから」

「先生。有難うございます。頂きます。でも脅かさないで下さいよ」

「吉川君。別に脅かしてはいない。靈障は場所や距離などは一切関

係ない。

電話で話しをするだけでも相手の霊障を受ける事もある。注意に越した事はない」

「は、はい。肌身離さず持っています。有難うございます」

吉川は恐縮した様子で黒瀬から護符を受取った。

「吉川君。君にもおかしくなられては困るからな。君だけだから。原稿が締切りを過ぎても待ってくれるのは」

黒瀬の言葉で、張り詰めていた雰囲気が一瞬和やかになった。

「ところで、霊障が起きた場所と状況についてもっと詳しく話して下さい」

「はい。場所は高知県東部の徳島県との県境に近い村です。ネットの投稿者は二十五才の青年です。四駆で四国を旅行中に高知から徳島に抜ける計画で

国道五五号線から県道二〇七号線に入り徳島に向けて一時間程走ったところ

で急に睡魔に襲われたとかで、事故を起こしてはまずいと思い県道沿いの

小さな村に入る細い吊り橋の手前で車を止めて仮眠を取り始めたとの事です。

時刻は午後十一時過ぎ。すると、夢の中で小さな神社が見えてきて、その石段

を登って行き、途中でお社を見上げると、赤い幟のぼりのような、旗のような物がお社を囲むように沢山見えてきて、突然お社の扉が開いてお

札のような

物が見え、それには“維高大明神”と書かれていたとの事です。青年はそこで

目が覚めて、時計を見ると午前〇時三十分を過ぎていたとか」

「それが心霊現象かね」

黒瀬が口をはさんだ。

「先生。まだ続きが有るのです。目が覚めたその青年は車を止めていた反対側

を見ると山の斜面に石の鳥居が有り、夢で見たのと同じ石段が有ったので、

車から降りてその石段の所まで行き上を見上げると暗くて何も見えなかった

ので、一旦車に懐中電灯を取りに戻ってからその石段を上ったとの事です。

石段の幅は二メートル程で、お社の有る最上段までは十数メートル位ではな

かったかと。石段の中程まで上って行くと、社の回りが薄明るくなつたよう

な感じで、やはり夢の中で見たのと同じ赤い幟のような、旗のような物が社の

回りに沢山見えたとかで」

「その青年は夜中に一人でそんな所に行つて怖くないものかね」

黒瀬は不思議に思った。

「その青年は空手の有段者とかで怖い物知らずで、最初は狐か狸が

化かしに
来たのかと思つたらしいです」

「ははあ・・・成程な」

黒瀬が納得したように言った。

「しかし、石段を中程から更に上ろうとしても足が動かなくなり、私達

スタッフと同じように目から頭が猛烈に痛くなってきたので、石段を下

りようとして躓いて下まで転げ落ちてしまい、やっとの思いで車に戻った

途端に意識を失ったとかで、気が付いたら午前七時を過ぎていたと言つて

いました」

「最初から全部夢だったのじゃないのか」

「いや。そうでもないのです。目が覚めると足と腕に擦り傷があり、懐中電灯が鳥居の石段の手前に落ちていた、と言っていました。そして

未だに目の痛みと頭痛が取れないようです」

「それで、私達もその神社の有る村に取材に行った訳なのです」

「その村の人からは取材中に何らかの話を聞いたのかね」

黒瀬が武田に訊いた。

「はい。村の長老に会う事が出来ました。そして、訊いたのですが、『そんな馬鹿な事はない。狐か狸に化かされたか、酔っ払っていたのでは』

と笑われました。そしてあの問題の神社は『村にとっては先祖代々伝わる

神聖な場所で許可無く足を踏み入れる事は一切してはならない』と言も

われました」

「それで、君たちは長老の許しを得ずに神社へ上ろうとしたのだな」

「はい。長老に取材の許可を申し出たのですが、許して貰えなかったも

ので。夜中に再び戻ってきて・・・」

「無茶をするものだな。それでその時の様子は・・・？」

黒瀬は呆れた。

「はい。私とスタッフ三人が神社の石段を上りました。そして、石段の中段

まで来たところで、矢張りお社の上に赤い幟の様な物が何本も見えました。

妖気と言つか、生暖かいと言つか、血の匂いのようなものも。それからです、

私とスタッフ三人が猛烈に頭が痛くなったのは。私の場合は暫くして収まり

ましたが、三人のスタッフの症状が酷くて、ビデオカメラも回せない状態でした。

それで、仕方なく、スタッフを順番に私が抱えて車に戻しま

した。

全員が車に戻り、車の中から様子を伺っていましたが、三人の状態が益々酷くなってきたので、私が車を運転して急遽ホテルに戻った次第です」

「その時、山口先生はどうしていたんだね」

「取材を始める前に、一緒に神社に行って頂くようお願いしました。

しかし、山口先生は車から除霊の為の霊気を送るからと言われまして、ずっと車の中に居られました。そして私とスタッフが車に戻ると、真っ青な顔をされて口が利けない状態でした」

「そういう事か。山口先生とやはそこで大変なものを見たのだろうな。

自分の力の及ばない何かを」

黒瀬は更に続けた。

「先祖代々からの言い伝えとか、それに関連した神聖な場所などはそれ

なりの理由が有るんだよ。君たちメディアはその隠された秘密を知り視聴者に知らせたいのだろうがね」

黒瀬が少し怒ったように武田に言った。

「軽率でした」

「彼らには彼ら也に、先祖代々伝わった、守らなければならない、仕来りが有るんだよ。今の時代になっても」

「申し訳ありませんでした」

武田は神妙な顔をした。

「私に謝られても困るよ。それで、その村の長老にお札に書かれていた維高大明神についても訊いたのかね」

「はい。訊きました。すると長老は突然怒りだして、『わしはそんなのは知らん!』
と言つて、私たちを家から追い出しました」

「その時、霊能者とか言う山口先生はどうしていたのかね」

「長老に取材の許可を貰う交渉の時は車の中で待っていて貰いました。長老は車の中では何か呪文のようなものを唱え続けていましたが。そう言

えば、

山口先生はあの村の取材では車から一步も出ませんでしたね」

「そうか……。困ったな。君のところの三人のスタッフはおそらくこちらで除霊や祈祷しても無理だな。そしてその今回の投稿者も」

黒瀬はかなり厄介な状況だと思った。

「黒瀬先生。それでは如何すれば良いのでしょうか」

武田が困った表情をした。

「一番の方法はその村に行き、長老に事情を話して、誠心誠意詫びて許可を貰い、その神社の鳥居の前で護摩を焚いて、鎮魂の祈祷をする事だな。それ以外に方法はないと思うね。触らぬ神に祟りなしだよ。君たちはそれを触ってしまった。だから、詫びを入れてお鎮まり願う方法しかないよ」

「先生。もし長老から許可を得られない場合は」

武田が心配そうに訊いた。

「とにかく、君たちが事情を話してその長老から許可を貰うしかないだろう。」

鎮魂の為の摩焚きと祈祷だから許して貰えると思うが」

「先生。それでは護摩焚きと鎮魂の祈祷は」

武田が懇願するような顔をして黒瀬に訊いた。

「困ったな・・・」

黒瀬は内心本当に困ったと思った。今の話を聞いただけでも、強い力を

持った怨霊である事は想像出来る。黒瀬自身の行者として持つ力が、今回の怨霊にどれだけ通用するかは、今の段階では全く分からない。それ故、迂闊に引き受ける事が出来なかった。

「先生！」

武田が再び懇願するように言った。
黒瀬は迷った。

「先生。是非、お願いします」

吉川と武田が口を合わせたように懇願した。

「護摩焚きと祈祷は私がするしかないか」

黒瀬はポツリと言った。

山口何某の先生にしても、昔はそれなりの修行と経験は積んでいるはず。

それが、太刀打ち出来ないとなると、普通の事故死や、自殺者などの死霊

や恨みの霊とは全く違う。ましてや、神社に神として祀られる程の怨霊と

なると、この世での位も高く、並大抵の怨霊ではない筈。嘗て、菅原道真

を天神様として北野天満宮に祀ったのは、怨霊と化した菅原道真を神とし

て祀り、怨念を鎮める為であつた。力を持った陰陽師、行者、祈祷師が如何

なる呪術を尽くしても、封じ込める事が出来ない程、怨霊の力が凄まじく強

いのである。それ故、怨霊に神としての位を授け、崇め祀る事によつて、

お鎮まり頂くのである。同じ様な、怨霊を鎮める為に造られた神社

は日本
各地に沢山存在する。あの村の神社もその類か・・・？村の長老を
説得し
ても、状況によつては許可しない事もありうる。たとえ長老が許可
しなく
ても何らかの方法で護摩焚きと鎮魂の祈祷をやらなければ成らない。
でも
護摩焚きは密かに行う事は不可能である。どうしても長老の許しが
要る。

黒瀬は迷っていた。

「それでは、一度現地に行つてみるか」

黒瀬は暫く考えてから言つた。

「先生。有難うございます」

武田が平身低頭して礼を言つた。

「それでは・・・、出発は九日後にしよう。直ぐに現地で行う護摩
焚きの
準備を始める。明日から七日の間は私の所で祈祷をして様子を見て
みよう。
七日間の祈祷で何らかの現象や知らせが有るはずだ。私も君のスタ
ッフの
為には出来るだけの事はしよう。しかし、現象や知らせの内容によ
つては、
出発を延期する可能性もある事は承知しておいてもらいたい」

黒瀬はこれも与えられた修行かと思ひ心を決めた。

「先生。私も一緒に行くのでしょうか・・・」

吉川が恐る恐る訊いた。

「勿論、そうだよ。護摩焚の助手が要るからな」

「でも、会社が」

「君の社には私の取材旅行に同行する必要があるからと言っておくよ」

「分かりました。でも先生。大丈夫でしょうか・・・」

吉川は不安そうに言った。

「大丈夫と思ったから、君は私に相談を持ちかけたのだろう」

「ああ、そうでした」

「それと、当日の航空券と宿泊先の手配を忘れずに。旅費と宿泊費はそちらで頼むよ」

黒瀬が武田に言った。

「先生。それは勿論です。それと山口先生は一緒に行って頂く必要は有りますか」

「いや。全く必要無い。返って足手纏いになるだけだ。たとえば言ってもあの

先生は何らかの理由を作って来ないだろうよ」

「分かりました。それで、当日は現地のネットワーク局の知り合いに車を
手配させます」

「あまり大袈裟にならないようにな」

黒瀬が武田に注意した。

「はい。先生」

その3

黒瀬は自宅に戻ってからつくづく反省した。人から頼まれるとなかなか断れ

ない性格であつた。ましてや、困っている者が目の前にいると尚更である。

それで今まで何度も死ぬ思いをさせられている。後は、神仏を念じ、ご守護

を願うしかないか・・・と思った。黒瀬は書斎でこれからの対策を考えた。

「赤い幟、赤い旗、・・・」

「四国・・・」

「怨霊、怨念・・・」

「維高大明神・・・」

黒瀬は頭の中で何度も、何度も繰り返した。とにかく、明朝から祭壇で祈祷

を始めれば七日の間には何らかの現象が出るか、知らせが必ず来ると考えて

いた。七日間で駄目なら二十一日間続けるしかない。黒瀬は行者として何度

も経験している事ではあつた。

一日目、二日目は何らの現象も知らせも無かつた。三日目の祈祷が終わった

日の夜、床について熟睡しかけた頃、夢の中で鎧兜の武者と若い僧侶の姿が見えた。徐々に黒瀬に迫ってくる。恐怖感と共に体全体が重苦しくなった。直ぐさま九字を切ろうとしたが腕が動かない。体も動かすことが出来ない。金縛りである。二人の顔が目の前に来た。もう駄目かと思った瞬間、目が覚めた。黒瀬の体は強張っていた。天井にはその二人の姿がはつきりと見え、黒瀬を見据えていた。二人は暫らくして振り返り姿を消してしまった。黒瀬にはこのような現象は日常茶飯事であるが、歓迎したくない現象には違いなかった。その為、夜は小さな明かりだけは必ず点けて寝るように習慣付けている。少しでも明かりがあれば霊も容易には出て来られないのである。四日目の夜は昨晚の事も有り、念珠を枕元に置いて寝る事にした。すると、今度は海上に行く赤い幟を靡かせた何隻もの和船が見えた。昔の都であろうか、先頭に数名の馬に跨った鎧兜の武者とそれに付き従う数多くの赤い幟を靡かせた武者が歩いている姿も見えた。五日目は、赤い幟と白い幟を靡かせた何隻もの和船が入り乱れている戦の光景を見た。まるで歴史絵巻を見ている様であつた。

六日目の祈禱を終えた夜は熟睡が出来ず、頭の中は起きていた。そして、

最初に見た鎧兜の武者と僧侶の姿、そしてその背後には赤い幟を立てた沢山

の武者の列を見た。僧侶の姿をした者が、何か話し掛けてきているようであつた。

だが、黒瀬には聞こえなかった。腕も体も動いた。九字を切ろうかと思つた。

しかし、害をもたらす相手以外でなければ九字は切れない。黒瀬は迷つた。

「彼らは何らかの望みが有るのか？」

結局、九字は切らずじまいであつた。

「赤い幟、そして鎧兜の武者……」

「確か、赤い幟は平家の印……、白い幟は源氏か」

「さすれば鎧兜の武者は平家……」

黒瀬は、これは明らかに平家に関わる怨念であり、その聖域を侵したが

為の靈障と思つた。

「それでは、あの若い僧侶は……」

あの投稿者の青年が夢で見た“維高大明神”についても気になった。神として、

大明神として祀られる者は余程位の高い人物である。日本全国平家

の落人伝説は

山ほど有り、中には真実と思われるものや意図的に作りだされたよ
うな物も沢山

有る。夜中の二時過ぎであつたが黒瀬は直ぐに書斎に行きインター
ネットで平家

とその落ち武者伝説について調べ始めた。黒瀬は平家と源氏の戦に
関わった平清盛

以降の系図をまず調べた。

維高大明神は誰なのか。平家には維高と言う名の人物は見当たらな
い。清盛の子で

維が付くのは六男の維俊がいる。しかし嫡流は重盛であり、重盛の
嫡男は維盛^{これもり}。

維盛の嫡子は六代である。しかし・・・、六代は幼名で正式には高^{たか}
清^{きよ}である。

維盛と高清。維高？

「まさか」と黒瀬は思った。

歴史上の記述では平維盛は一一八四年に屋島の戦から、密かに那智
熊野に逃れ、

その後、那智の沖で入水した事になっている。六代こと高清は一一
八五年に北条方に捕らえられたが、

文覚上人の庇護を一時受け剃髪して妙覚^{みよかく}と名乗り出家し、

その後は文覚上人が源氏に謀反を起こし隠岐に流された後、一一九
八年に二十七歳で斬首されている。

すると、あの鎧兜の武者が維盛、僧侶の姿が剃髪した高清・・・。

それではあの村に代々住んでいるのは、維盛の家臣の末裔で怨霊と
化した主とその嫡子を密か

に神として祀り続けているのか。或いは、維盛と高清が何らかの方法で四国の山中に家臣と共に

逃れ来て密かに住んだのか。当時は主君やその跡継ぎは身代わりを立てて落ち延びるという話も

実際に有る。それ故、日本各地で多くの落人伝説も残っている。土佐物語などの文献によれば

当時は、あの集落の有る土地一帯は源氏方に加担した安藝氏が治めていたはず。

安藝氏は蘇我赤兄そがのあかえの末裔と言われ、壇ノ浦の戦では安藝広康の子、実元と実俊

が源氏方に加わり、壇ノ浦の戦いで平教経たいしゅうけいの両脇に抱えられ共に海に沈んだ事

になっている。あの時代に源氏方の土地で生き長らえるのは至難の業と思える。黒瀬は頭の中が混乱してきた。

明け方近くになり、黒瀬は少し睡眠をとる事にした。二時間程眠ったであろうか、黒瀬は電話の鳴る音で目が覚めた。

「もしもし、黒瀬です」

眠そうな声であった。

「先生、おはようございます。吉川です」

「ああ。吉川君か。どうした」

「明日の飛行機の予約が取れましたので、ご連絡と思い。それに出発は予定通りに為さるかと思ひまして」

「出発は予定通りだ。ところで、今は何時かね」

「午前九時です」

「もうそんな時間か」

「まだ、お休みでしたか」

「いや、いい。少し寝すぎたかな」

「昨晚は徹夜で・・・？」

「例の件で調べ物が有ってね、つい遅くなってしまった」

「何か分かったのですか」

「まだ確信が持てないが、平家の落人に関係しているようだ」

「平家の落人ですか」

「その可能性が大いに有るようだ」

「そうですね。四国は平家の落人伝説が多い土地ですから」

「まあ、詳しい事は明日にでも話す事にするよ」

「分かりました。明日は羽田午後二時三十分発の高知行き便を予約しました。」

「午前十時三十分頃に社の車でお迎えに伺います」

「ああ、それは助かる。荷物が多いのでどうしようかと考えていたところだった」

「それで、明日は高知空港から安芸に行き、その日はそのホテルで泊まり、翌朝に例の村に行く予定でいます」

「分かった。それでは明日」

電話を切った後、黒瀬は急いで祭壇に行き、朝のお勤めを始め、その後七回目の祈禱を行った。祈禱が終り、目を半眼にして祭壇に向かって瞑想をしていると声が聞こえた。

「世が世なら、この者達は都にいるものを」

これを聞いて、黒瀬は矢張り平家の落人であると確信した。都から逃れ落延びたもの

達の都への執着と、代わりに都を支配した者への怨念か。

黒瀬は護摩壇を組む為の組木と護摩木の荷作りを始めた。今回、護摩壇は二十一段組

む必要があると考えていた。普通は七段であるが、強力な怨霊やその霊障などには

二十一段組む事になっている。二十一段の護摩壇の場合は神仏から、より強い霊力を得る事が出来るのである。

黒瀬は全ての準備を終えた。後は如何に村の長老から神社の前で護摩焚きを行う許可を得るかで思案した。事が事だけに密かに執り行う事も出来ず、どうしたものかと考えあぐねていた。

明日からの大事も有り、昨晩は半分徹夜の作業だったので、今日は早めに床に就く事にした。祭壇に神仏の守護を頼み、結界を張り、枕元には念珠を置いて眠りに入った。しかし、昨晩と同じく睡眠は浅く頭の中は半分起きている状態であった。様々な光景が見えてきた。五日目と同じ赤い幟と白い幟を靡かせた和船が入り乱れる光景、武者同士が切り合う光景、山奥を傷ついた武者の集団が歩いている光景、神社の社も見えてきた。様々な光景が入れ替わり立ち代り見えた。何故、このような光景を見せられるのか、黒瀬には目的が分からなかった。その内に黒瀬はやつと深い眠りに就く事が出来た。

その4

翌朝、吉川が編集社の車で迎えに来た。

「先生、おはよう御座います」

「おはよう」

「先生。昨晚は良く眠れましたか」

「良くもないね」

黒瀬は寝不足気味で少し皮肉まじりに言った。

「そうでしたか」

「吉川君は良く眠れたのかね」

「はい。良く眠れました」

「そうか」

「武田は空港のロビーで待っているとの事です」

「彼には変わった事はないのかね」

「今のところ彼も変わった様子は無いようです。先日、先生に言われてから直ぐに実家に帰り、お参りしてきたと言っていました」

「ああ、それは良い事をした。これからも守ってくれる事だろう」

黒瀬と吉川は車で羽田に向かった。

空港のチェックインカウンターの前で武田が先に来て待っていた。

「先生、お早うございます。今回は色々と面倒をお掛けし
申し訳ありません」

「いや。それは別に構わない。おかげで、久しぶりに四国に旅行が
出来る。」

あちらの食物は旨いからな、君たち。酒も旨いし。少しは楽しみが
ないとな」

「はあ・・・」

吉川が頼りなげに言った。吉川はこれから何が起こるのか不安で
内心びくびくしていた。

高知空港では、武田の手配でネットワーク局の車が待っていた。

「やあ。武田さん」

「山崎さん。ご苦労様です。今回は色々お世話になります」

「とんでも有りません。武田さんのお役に立てて光栄です」

「そう言って頂けると有り難いです」

「荷物もお有りとこの事でしたので、車はワンボックスカーを

用意しておきました」

「有難うございます。それから紹介しておきます。こちらが作家の黒瀬圓先生。そしてこちらが、たまき出版の吉川君。吉川君は私の大学時代の友人です」

「黒瀬です。宜しく」

「山崎です。宜しく願います。黒瀬先生にお会い出来て光栄です。」

時々、先生の小説は読ませて頂いております」

「そうでしたか。今後とも宜しく願います」

「はい。これからも先生の小説楽しみにしています」

「たまき出版の吉川です。宜しく願います」

「山崎です。こちらこそ宜しく願います。車は空港を出たところに止めて有ります。これからご案内します」

山崎は三人を車が止めてある場所まで案内した。

「この車は自由に使って下さい。連絡頂ければ空港まで引取りに来ます。」

宿泊先は先日のメールで連絡したホテルです。滞在日程が決まっていな

いと事でしたので、取りあえずは二泊で頼んでおきました。延長もキャンセルも出来ます。局がよく使うホテルなので無理は利きます。安心して下さい」

「山崎さん。色々手間を掛けさせ申し訳ありません」

武田が山崎に礼を言った。

「黒瀬先生の取材旅行ですから、十分に取材して頂いて、良い本を書いて

貰ってください。楽しみにしています」

そう言つて山崎は別に待たせていた車で局に戻つて行つた。

「取材旅行になっているのだね」

黒瀬が訊いた。

「はい。その方が良いと思つたもので」

武田が黒瀬に言つた。

「それでは、取りあえずはホテルにチェックインしてから詳しく話す事にしようか」

ホテルにチェックイン後、三人は最上階のレストランに行つた。

「先生。何を召し上がります」

吉川が訊いた。

「私は最初にビール、それから刺身。あとは焼酎のロックを頂く。折角、高知まで出来たのだから旨い物を食べて、飲まないとな」

黒瀬の旅先での唯一の楽しみであった。

「分かりました。武田君はどうする」

「私も刺身を頂きます。それとビールを」

注文が終り、酒と肴が揃ったところで、黒瀬が話し始めた。

「あれから七日間の祈祷をして、色々な現象が出てきた」

「吉川から聞いたのですが平家の落人に関係が有るとかで」

「どうも、そうらしい。いや、確かだ」

「四国は特に落人伝説が多いですから」

武田が言った。

「今回は伝説でなく本物だと確信している。あの村に住んでいるのは、

長年秘密を守ってきた平家の落人の末裔だ。それと、あそこに有る神社は怨霊封じの可能性も有る」

「隠れ落人と怨霊封じですか」

武田が訊いた。

「そう言う事だ。あの問題の神社は落人達の主とその嫡子を密かに祀り、

怨念を鎮めるための神社のようだ。だから、よそ者が立ち入るのを拒んだのだよ。特に源氏の血を引く者や平家に敵対する者に対しては容赦はない」

黒瀬は続けた。

「あの集落一帯は、元は安藝氏が治めていた土地だ。安藝氏は壇ノ浦で源氏方に加担している。源氏方の土地で平家の落人が暮らして行くには全てを隠す必要が有る。それが、代々受け継がれ現在に至っているようだ」

「そうでしたか」

武田が感心した。

「今のような時代でも隠し通す必要が有るのですかね」

吉川が訊いた。

「時代が変わっても、あまりにも怨念が強すぎる為に、そうせざるを得ないようだ。祀られている者と祀る側の人間とは時代が経つにしたがって考え方も違ってくる。ただ単に神として祀るだけなら別に問題は無い。問題は源氏に対する怨念と京の都に対する執念だ。今でも平家や源氏の血筋を引く人間はこの世には多勢いる。たとえば自分が平家の出か源氏の出か分からなくても。あそこに祀られている者達にはその見分けがつくのだよ。怨霊を鎮める一番の方法は、あの集落に住んでいる者全てと、神社のご神体を京都に移す事だ。しかしそれ

は今の時代不可能だ。考えられるのは、せめてご神体とそれに付いている霊達だけでも京都に移し、何処かで祀り上げる事ぐらいだ」

「そんなに、怨霊は怖いのですか」

吉川が再び訊くと、

「怨霊にも強い弱いはあるが、今回の怨霊は相当強力な怨念の力を持ち、

それを未だ維持し続けているようだ。いくら時代が変わっても彼等は源氏を恨み、そして呪い続けている。彼等は京の都に戻りたいとの強い執念を今でも持ち続けている。鎌倉幕府も三代將軍源実朝が暗殺されて源氏の政権は絶えて北条家に実権を取られている。これも平家の怨念によるものと推測される。一説によれば、北条は平貞盛の子孫が坂東平氏と称して伊豆の北条に移り住んだのが始まりとの説もある。結果的に平家の血を引く北条に源氏が滅ぼされた事になる。しかし、北条が源氏を滅ぼしても、まだ平家は京の都に帰れずにいるわけだ。その後に足利氏が政権を取ったが、足利氏は清和源氏の流れを汲む河内源氏の家系だ」

「歴史は、なかなか複雑ですね」

吉川が言った。

「おそらく、あの神社に祀られているのは平維盛と嫡男の六代こと高澄と推測できる。維と高で維高大明神になる訳だ。彼らが生き延びて家臣と共にあの地に逃れ来たのか、或いは家臣だけがあの地に来て、主とその子を祀っているのかは不明だ」

「先生。凄い事になってきましたね。維盛と六代が逃れ来たのが

事実でしたら歴史が引つ繰り返りますね」

吉川が言った。

「吉川君。歴史は引つ繰り返らんよ。霊界で事実と証明されても、この世での証明は出来ないよ。誰も信じない。唯の伝説で終わってしまう」

「今の先生のお話ですと武田と三人のスタッフ、投稿者は源氏の血を引いているのですかね。或いは、平家に敵対した家系とか」

「些かなりとも、その可能性は有る」

「執念深いと言うか、根が深いですね」

吉川が言った。

「そうだ。しかしそれには理由が有る。平清盛は源氏との戦に勝利を収めても源氏を決して根絶やしにはしなかった。平家は情の深い人間の集まりだ。平治の乱で平家が勝利した時も源義朝の子供である幼き頃の頼朝と義経の命を救った。しかし、それとは逆に頼朝は婦女子に至るまで平家を残忍なやり方で根絶やしにしようとした。だから一層平家の源氏に対する怨念は深く強いものになっているのだよ」

「そうだったのですか」

武田が納得したように言った。

「だから、心霊現象や怪奇現象を興味半分メディアが取り上げるのは良くないのだよ。取材などで踏み込んではいけない領域に踏み込ん

でしまい、寝た子を起こす結果にも成り兼ねない。今回、君達はそれを侵してしまったのだよ。特に怨霊は最も危険だよ」

「迂闊でした」

武田が反省した表情で言った。

「君達メディアが取材するのも良いだろう。しかし、行って良い場所か

悪い場所かは事前に調べておく必要がある。その為に霊能者を雇って

るのだから。霊能者か何か知らないが、あの山口先生に事前に調べさせ

る事も出来た筈だ。もし、その先生が力を持った霊能者が祈祷師であっ

てだな、日々の勤めで何らかの事を事前に察知出来ていれば、今回のよ

うな事は防げたはずだ」

「そうでしたか」

武田が感慨深げな顔をした。

「そうだよ」

黒瀬は語気を少し強めた。

「山口先生はあちこちのテレビ局から今引張廻でなかなかスケジュールの

調整が付かないとの事でしたので、私の局も予定をお取り頂く為に

二ヶ月

前から精細な企画書を持ち込み、取材協力と出演の依頼をしてありました」

「二ヶ月も有れば充分だよ。ましてや詳しい企画書を貰っていれば、それを

祭壇に長くても二十一日間祀り上げておけば普通の霊能者や祈祷師であれば、

事前に霊の持つ力や霊障を予知出来る筈だ。それが修行をした霊能者や祈祷

師としての責任だよ。おそらくあの先生は面白可笑しくテレビに出る事で

チャホヤされて有頂天になって、祀り上げもせず、日々の神仏への勤めも

疎かになっているのだろうよ」

黒瀬が腹立たしそうに言った。

「黒瀬先生。よく分かりました。スタッフ三人と投稿者の受けた霊障を早く

取り除いてやって下さい。今回の事は私にも責任があります。何卒、お願いします」

「私としても話を請けたからには出来るだけの事はしよう。今はそれだけしか言えないが」

「長老とはどのように話しをされるご予定ですか。なかなか頑固で手強い相手のようですが」

横で話を聞いていた吉川が訊いた。

「問題はそれだが、明朝までには何らかの策が思い浮かぶかもしれない」

黒瀬は自ら祀る祭壇のご本尊・眷属からの知らせを待っていた。

「明日は何時にホテルを出発しますか」

武田が黒瀬に訊くと、

「午前七時にここを発とう」

「ええ……。先生、早いですね」

吉川は少し不満げであった。

「事は早いほうが良い。今晚も護符は肌身離さず持って、部屋は明るくして寝るように」

「分かりました」

武田と吉川が同時に言った。

そして黒瀬は武田と吉川に体の周りに結界を張る護身法の印を教えた。

黒瀬はもう少し肴と地酒を味わいたかったが、明日の大事が控えているので部屋に

戻る事にした。武田と吉川も黒瀬の意に従い共に部屋に戻って行った。

その5

黒瀬はシャワーを浴びた後、ベッドに横になりながら明日の長老との話

について思案していた。護摩焚きと鎮魂の祈祷をすれば、今回の三人が受

けた霊障だけは収まると思った。霊障を取り除くだけの事は黒瀬にとつて

然程難しい事ではなかった。しかし、その前に長老を説得し、神社の前で

護摩焚きをしなければならぬ。護摩焚きの後に、御霊に対して侵した事

への許しを得る鎮魂の祈祷もしなければならぬ。でなければ霊障を取る

ことは不可能であつた。長年の経験から火による焚上げが一番効果がある

ことを黒瀬は知っていた。護摩を焚く事により、あらゆる神仏の力を招致

し霊障を祓ってもらう事が出来る。怨霊による霊障の場合は水より火の力

が遙かに効果的である。火と水を使えば、更に効果は出る。

黒瀬は思案していた。時計を見ると午後十時を過ぎた頃であつた。

黒瀬は

もう少し皆と飲んでいれば良かったかと、物足りなさを感じていた。

良い案が思い浮かばないままベッドに横になって天井を見ていた。すると、

自宅の祭壇に祀つてある三社の社が薄っすら浮かんで見えた。

そして、左の社の扉が開いて中が真赤になり、巻物を持った衣冠束

帯の者

が出て来るのが見えた。その者は何も言わずに巻物を広げて黒瀬に見せた。

「その者、平家の縁の者なり。この度の役目は縁あつてのこと。二十一

段での護摩焚きの後は、かの社よりお札を取り出し白い紙に包み、都の祇園社

境内に密かに埋めよ。さすれば素戔鳴尊すさのおのみことの力により

怨念は鎮まる。さらに“南無六代妙覚自在天”のお札を式枚作り、各々蓮華王院と鞍馬寺に納めよ。村の長はおさその者に従う。この事、その者と長と村の者、平家の縁者のみで執り行え」

黒瀬が巻物を読み終えた瞬間全て消え去った。黒瀬は巻物に書かれていた

ことを自問自答した。

都の祇園社とは・・・、祇園社、祇園社、祇園祭、八坂さん・・・、京都の八坂神社の事か。八坂神社の御祭神は・・・。黒瀬はインターネット

で調べ始めた。素戔鳴尊は御祭神三柱の内の一柱であり、偉大な神格を持つ

た神で怨霊封じには絶大な力が有る。

蓮華王院は何処の寺か、黒瀬には直ぐに思い出せなかった。三十三間堂の

正式名と気が付くには少し時間が掛かった。蓮華王院、即ち三十三間堂は

千手観世音菩薩をご本尊として祀り、後白河法皇が平清盛に命じて作らせ

た寺であり、平家とは縁が深い。

鞍馬寺は……。あそこにも千手観世音菩薩、そして毘沙門天、護法魔王尊が祀られている。本堂からは京の町が一望出来る。

鞍馬寺は義経が幼少の折に清盛の情けで命を助けられて後に預けられた寺でもある。義経が鞍馬に預けられる迄、清盛は義経を我が子と同じように可愛がっていた。

何れの寺も千手観世音菩薩が祀られている。六代こと高きが自在天に昇格すれば千手観世音菩薩の庇護の下、京の都で平家一門の霊を弔うことが出来る。素戔鳴尊の力により怨念を鎮め、南無六代妙覚自在天として平家一門の霊を弔う事。その為に私の役目は彼らと郎等の霊を京に連れ戻す事か。それも、平家の縁者のみで行う事。

今回の事に源氏の血筋の者が加われば郎等達の怨念が更に強くなり暴れ出す可能性が有る。黒瀬は自分の役割が、少しは理解で出来たように思えたが、半信半疑であった。また、村の長老が私に従うとの事。しかし、如何にして長老に説明し、納得して貰うかであった。霊界に通じた行者や祈祷しなると

もかく、普通の人間がこの様な話を信じるはずが無い。護摩焚の許しを得る
事だけで頭を悩ませているにも関わらず、お札、即ちご神体までも持ち出し
京都まで持ってゆく事などは絶対に許可などほしない筈である。ス
タッフと
同じ様に追い返されるのが落ちだ。

翌朝、黒瀬は早めに起きて武田と吉川を部屋に呼んだ。

「先生。おはようございます」

武田と吉川が眠そうな顔で挨拶をした。

「出発は七時と聞いていましたが」

吉川が言った。

「そうだが、少し事情が変わった。今回は私一人であの村に行く事にした」

「先生お一人で大丈夫でしょうか」

武田が心配そうに訊いた。

「武田君。大丈夫だよ。全ての準備は粗方整ったよ」

黒瀬はそう言ったものの、村の長老を如何に説得するかで内心悩んでいた。

「そうですか・・・」

武田はまだ納得いかない様子だった。

「君達は、今日このまま東京に戻ってくれたまえ。車は暫く私が使わせてもらう。」

仕事が終わったなら車は空港でなくて高知駅で武田君の友人に返すようにする」

「それは一向に構いません。私の方からも局の友人には連絡しておきます。」

彼の携帯の番号をメモしておきますので返す前に電話をしてやってください。」

そうして頂ければ彼が高知駅まで車を引取りに行きます」

「有難う。無理を言つてすまない。それと村の長老の名前と家までの地図を頼む」

武田がメモ用紙に長老の名前と地図を書き黒瀬に渡した。

「名前は今井清隆氏か。場所は・・・分かった。有難う」

「先生。本当にお一人で大丈夫ですか」

吉川が心配して訊いた。

「大丈夫だよ。心配いらん。悪いが荷物を車に積むのを手伝ってくれ」

そう言ったものの、黒瀬は気が重かった。

「分かりました」

武田がそう言つて、吉川と二人で荷物を車に積み込んだ。

「この村での件が上手く収まればだが、最後の仕上げに京都に行く事になる。」

東京へは四、五日で戻れると思うが」

「先生。気を付けて行つてきて下さい」

武田が心配して言った。

「それと、武田君に頼みが有る」

「はい。何でも言つて下さい」

「護符を四枚、君に渡しておく。一枚は投稿者、残りは君のスタッフに渡すように。」

そして君のスタッフは何処か近くの八坂神社に連れて行き、すぐに御被いを受けさ

せてもらいたい。投稿者にも事情を話して、近くの八坂神社を探して必ず行つても

らうように。君達も、今から空港に行けば十時過ぎの便には間に合うだろう。

そうすれば、今日中には君のスタッフにお被いを受けさせる事が出来る」

「先生。では、そうさせて頂きます」

「そして、神主にお願いして、このメモに書いてある祝詞を上げてもらうように。」

素戔鳴尊のお力を借りる必要がある。神社はあくまでも八坂神社でなくてはならない。

くれぐれも頼んだから」

そのメモには、

- 一に身み滌そぎ大おお祓はらい
- 二に大おお祓はらい詞ことば（中な臣かみの祓はらい）
- 三に六むろ根こ清きよ浄じやう大おお祓はらい
- 四に疫や神かみ祓はらい

と書かれていた。

「先生。それでは私達もすぐに東京へ帰る準備をします」

武田が言った。

「それでは、宜しく頼む」

黒瀬は車に荷物を積み終わるのを確認すると急いで村に向かった。

「先生、大丈夫かな」

吉川が車を見送りながら心配そうにしていた。

黒瀬はスタッフと投稿者を神社に連れて行きお祓いを受けさせる事まで

はしなくても良いと思ってはいたが、あの二人が心配して後で村まで来

られては困ると思ひ策を弄したのであつた。

その6

黒瀬は一時間程車を走らせ目的の村の入口に着いた。周囲を山に囲まれた

川の側に有る戸数が二十戸ほどの小さな集落で、如何にも落人の伝説に出て

きそうな雰囲気のある村だった。確かに村の入口の反対側の山の斜面には

鳥居が有り、神社に上る石段が有った。石段の上を見上げると社の天井だけ

が見えた。鳥居の手前には「村の者以外は許可無く立ち入りを禁ず！」と書

いた立札が立っていた。「これが」と黒瀬は思った。すると同時に、体全体

で非常に強い殺気と妖気を感じ、頭が強い力で締め付けられた。

「見られている。強い、あまりにも強すぎる」

黒瀬は小さな吊り橋を渡り村へ入り、武田が書いた地図を頼りに長老の家を

探した。長老の家はすぐに分かった。高さが一メートル程の垣根で囲まれた

百坪ほどの敷地の中に有る茅葺屋根の古い大きな家だった。

黒瀬は門を入り玄関の前まで来た。表札を見ると確かに今井清隆と書かれていた。

黒瀬が呼鈴を押そうとした時、庭の角に有る納屋の戸が開いて、年は八十歳前後

の日焼けした顔であったが、気品を漂わせた一人の年寄りが出てきた。

「今井清隆様でしょうか」

「私が今井清隆です」

「東京から来ました黒瀬と申します。実は・・・」

と黒瀬が言いかけたところで、今井が黒瀬の言葉を遮るかの様に言
った。

「黒瀬様ですか。お待ちしておりました」

黒瀬は予想外の言葉に一瞬戸惑った。

「私が今日こちらにお伺いする事をご存知だったのですか」

「実は今朝の四時頃に千手観世音菩薩様を背にされた、紫衣を召さ
れた

六代様がわしの夢枕に立たれまして、『今朝、訪れる者の指示に従
うように』

と申された」

今井は穏やかな顔をして言い、更に続けた、

「そして、こうも申された、『その者の労により、我が父と我は郎
等を伴い京

の都に戻る事が出来る。都で我が父と我で郎等どもの怨念を鎮め、
平家一門の
霊を弔う』と」

「そうでしたか」

「六代様はさすが仏様にお仕へなされたお方。清盛様と同じく情け深いお方です。」

この長い年月の間に彼岸に到達なされたのでしょうか」

今井が穏やかな顔をして言った。

黒瀬はこの村に来る事になった経緯を説明し、これからの手順を今井に

詳しく説明した。

「今日の午後十一時から護摩焚きを始めさせていただきます。護摩壇に使う組木は

車に積んでありますので、暫くの間、川に沈めておいて下さい。護摩木も用意

してありますので、村の方々にお配りし、御先祖様方の名前を出来るだけ多く

書いて貰って下さい」

「委細は承知いたしました」

今井が物静かに言った。

「護摩焚きは私と今井様だけで執り行います。そして護摩焚きの間は外部の者

の目につかぬように鳥居の周りを大きな幕で囲って下さい。儀式の間は村の方々

には外部の者が近付かないように見張ってもらうようにして下さい。それと、

護摩焚きを始める前に川で楔をします。この二月の寒い時期に大変申し訳あり

ませんが今井様にも楔をして頂きます。何卒お願い致します」

「寒かろうが、暑かろうが、私は一向に構いません。御先祖様方の役に立つ事で

あれば。またそれが将来、村の者達の為にもなるのであれば私はそれで本望です。

村の者には重ねて指示致しておきます」

今井は満足そうな顔をして言った。

黒瀬は続けた。

「護摩焚きが終わりましたら、お社の中に納めてあるお札を私がお預かりし京都

に持って行き八坂神社にお納めします。そして、別に新しい木札を二枚ご用意下

さい。それには“南無六代妙覚自在天”と同じに墨で書いて下さい」

「黒瀬様。その二枚のお札は如何されるのですか」

「一つは蓮華王院即ち三十三間堂、もう一つは鞍馬寺にお納めさせて頂きます」

「そうでしたか。これで六代様も自在天様に昇格され、京の都で千手観世音菩薩様

の庇護の下で心置きなく平家一門の供養が出来るのでありましょう。誠に有難い事です」

「私も、それを願っています」

「ただ、心配があります」

今井が不安げに言った。

「察しは付きます。あそこに居る郎等全てが付き従うかどうかでしょう」

「その通りです。源氏は壇ノ浦の戦の後、平家を根絶やしにしようとし、婦女子に至るまで殺戮し、胎内の子までも腹をかつさばいて殺めています。郎等の中には源氏方に妻子を殺された者達も大勢います。今でも彼ら郎等の恨みが強い怨念として残っております」

「今回は維盛様と六代様にお任せし、神仏の加護を信じ、執り行うだけです。今井様と私はそのお手伝いをさせて頂くだけです。その為に、私がこの村に来る事になったのです。必ずや良い結果が出ます」

「黒瀬様。有難うございます。良く分かりました」

今井は安心した表情をした。

その7

今井は打合せ通りに、護摩木を村の人々に配り、護摩壇の組木を川に浸けた。

後は時刻を待つだけであつた。しかし、黒瀬はこの村に入つて来た時に感じた

殺気と妖気が益々強くなってくるのを覚え、頭の芯が更に締め付けられる

感覚に襲われていた。

「全てが素直に従つてくれれば良いのだが」

今井にはあの様に言つたものの黒瀬には不安が残つた。

午後八時頃には鳥居の周りは既に大きな幕で囲まれて、外部からは見へな

いようになっていた。護摩木も村人から集められ、石段の前に積まれた。

南無六代妙覚自在天と書かれた二枚の新たな札は今井が作り、家の床の間

に置かれた。

黒瀬と今井は川原に下りて行き楔を始めた。

まだ二月の下旬。夜の川原は凍えるような寒さで、川の水も刺すように冷たかつた。

黒瀬と今井は下穿きになり川に浸かつた。

黒瀬は、身滌大袈、六根清浄大袈と続けて祝詞を上げた後に、大宇宙龍神の

御真言を百八回唱えた。

オンソラソバテイエイソワカ
オンソラソバテイエイソワカ

・
・
・
・
・
・

楔を済ませ水から上がると、周りの寒さとは逆に体が火照り、全体から湯気が立ち上った。身も心も洗われたようで清々しい気持ちになった。これで大事に臨む準備は出来た、と黒瀬は思った。

川に浸けてあつた護摩壇の組木を取り出し、鳥居の前で護摩壇を組み始めた。

午後十一時前には全ての準備が整い、黒瀬と今井が幕の中に入り、村人達は周囲を警戒した。

「今井様。これから始めます」

「宜しく願います」

黒瀬は莊嚴行者法の五つの印を結び、九字を切り、更に護身法と結界法の

印を結んだ。その後、身滌大袈、大袈詞（中臣の袈）、六根清浄大袈、疫神袈

と順番に唱えた。間を置いて大日如來の結界法を行い、光明真言を唱え、経文

を数巻あげた後、護摩壇に火を放った。

黒瀬は中咒（不動明王慈救咒）^{ちゆうじゆうふどうみやうおうちゆうきゆうのじゆう}を唱えながら護摩木を

一本ずつ丁寧に焼べていった。

ノウマク・サンマンド・バサラダン・センドマカロシャダヤ・ソワ
タヤ・ウンタラタ・カンマン

ノウマク・サンマンド・バサラダン・センドマカロシャダヤ・ソワ
タヤ・ウンタラタ・カンマン

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

暫くすると、黒瀬の耳に戦場の怒号が聞こえ、社の屋根の上に無数の赤い幟が

翻るのが見えた。石段の上には、髪を振り乱し、血みどろになった恐ろしい形相の武者、

顔半分が削げた武者、片腕だけの武者など多くの姿が重なり合って現れ、血塗られた

刀を振りかざし、今にも黒瀬に向かって来るかの様であった。強い力で押し

潰されそうで、頭の芯が締め付けられた。突風に逆らい向かって行くようなものである。

凄まじい怨念である。

中咒（不動明王慈救咒）を唱え、護摩木を焼べ続けた。石段の上から、

何度も強い風が吹いてきて、護摩壇の火が今にも消されるかの様であった。

このままでは負ける。黒瀬は咄嗟に真言を大咒である不動明王火界咒

ノウマク・サラバタタギヤテイビヤク・サラバボツケイビヤク・サラバタタラタ・センダマカロシヤダ・ケンギヤキギヤキ・サラバビキナン・ウンタラタ・カンマン

ノウマク・サラバタタギヤテイビヤク・サラバボツケイビヤク・サラバタタラタ・
センダマカロシャダ・ケンギヤキギヤキ・サラバビキナン・ウンタラタ・カンマン

[illegible]

必死の思いで不動明王火界咒を唱え続けた。何度も、何度も。すると、護摩壇の火が勢いよく燃え上がり、炎が石段の最上段にまで届きそうな勢いであった。その瞬間、黒瀬は炎の中に不動明王の姿を見た。横に居る今井が声を発した。

今井も炎の中に不動明王の姿を見たのであつた。それと共に、武者達の姿も徐々に消え、赤い幟も消えた。

黒瀬は汗だくになりながら火界咒を唱へ護摩木をくべ続けた。しかし、頭の芯はまだ締め付けられている感じであった。護摩木を

全てくべ終ると、

時刻は午前一時を過ぎていた。

黒瀬は光明真言を唱え、不動明王への感謝を込めて、南無大日大聖いの不動明王祈経きょうを上げ、

そして最後に千手観世音菩薩の加護を願うべく大悲心陀羅尼を上げた。

横に居た今井は疲労困憊で息を切らし、今にもしやがみ込みそうな様子であった。

「今井様。大丈夫ですか。動けますか」

「わしは大丈夫です。動けます」

「それでは、お社までお願いします」

二人は護摩壇の熱気で体全体が火照り、汗まみれであった。

エネルギーを使い果たし、精根尽き果てた感であった。しかし、まだ遣るべき事が有った。

黒瀬は不動明王火界咒を唱えながら、石段を一步一步慎重に上がり始め、今井もふらふら

であったが後に付いてきた。

黒瀬は足が重くなり、石段の下に押し戻されそうな強い力を感じた。

二人はやつとの事

で石段の上まで上り詰め、社の前に辿り着いた。

黒瀬は一旦呼吸を整へ、身滌大祓、大祓詞、六根清浄大祓、疫神祓を続けてあげた。

上げ終わると今井に社の扉を開けるように言った。

「今井様。扉をお開け下さい」

今井は錠前を外し、徐に扉を開けた。おもむろ社の中からは血腥い匂いが漂ってきて、

無数の殺気立った視線を感じた。黒瀬は素戔鳴尊を心の中で強く念じ、社の中に入り、

維高大明神のお札を取り出して素早く白い紙で包んだ。

すると観念したのか、血腥い匂い、殺気立った視線が消え失せ、頭の痛みも感じなくなった。

「朝まで、おれは今井様のお宅に置いて下さい。その後、私がお預かりし、

京都まで持つて行かせて頂きます」

「承知いたしました。有難い事です。黒瀬様も、さぞやお疲れでしょう。

暫くは私どもの家でお休み下さい」

「有難うございます。是非、そうさせて頂きます」

黒瀬は憔悴しきっていた。おれは今井が抱え一步一步慎重に石段を踏みながら

下りて行った。黒瀬も後に続いた。今井の横には以前に見た事の有る、馬に跨った

大将と思える鎧兜の武者と、その脇に若い紫衣の僧侶の姿が見えた。鎧兜の武者

と若い僧侶の後には赤い幟を立てた無数の郎等の列が続いていた。今井が無事に

石段を下り鳥居をくぐるとその姿は消えてしまった。

その8

今井の家に着くと、維高大明神のお札は居間の神棚に置かれた。黒瀬は今井の家で明け方まで休ませて貰うことにした。疲れたと思った。本当に疲れた。でも、まだ黒瀬にはやらなければならぬ大事な残されていた。京都に行き、これらのお札を納めなければならぬ。納めてこそ、全てが成就する。それまでは、まだ気が抜けない。この先、どのような妨げが有るかも知れない。

維盛、六代と郎等の霊が都に戻るのを喜ばない、何らかの強い力。白い幟の亡霊、怨霊達。彼らは決して許さないであろう。その為には、

これから黒瀬に様々な妨げを仕掛けてくる事は十分に予測出来る。命の危険も有る。

もし、黒瀬が役目を果たす事が出来なければ……。成り行き次第では、

今は静かにしている平家の郎等の亡霊が暴れ出し、怨霊同士の戦が始ま

る可能性も有る。黒瀬には荷が重過ぎると思った。何故、このような役割を背負わされたのか。何故、神仏はこのような役割を私に与えたのか。

疲れが更に増した。

「黒瀬様。この度は、大変お世話になりました。村の代表としてお礼を申し上げます」

今井が深々と頭を下げ感謝した。

「これも、縁あって大事を仰せつかった者としての当然の役目です」

「風呂も沸いております。汗をお流し下さい。奥に床も敷いてあります。」

汗を流された後は十分にお休みください」

「有難うございます。それでは、そうさせて頂きます」

「黒瀬様。その前にお願ひがあります」

「何でしょうか」

今井は少し話し辛そうにしていた。

「この老いばれと一緒に京都までお連れ下さいませんか」

黒瀬もお札を納めるに際して、今井に京都まで同行を願へばと考えていた。

「わしには、最後までお札が納められるのを見届ける責任があります。」

黒瀬様のお力を信じていないのでは有りません。決して誤解なさいで下さい」

「それは、十分に分かっております。今井様が村の長おさとして、今回の事を最後まで見届けたいとお気持ちは当然でございます。実は私も今井様に京都に同行頂き、今井様自らのお手で、お札を納めて頂ければと思っております。それが、今までご先祖様方を守ってこられた村の長としての役割であり、筋と思います。不都合で無け

れば、是非そうして下さい。私からお願いします。そうして頂ければ、私も心強いです」

「そうでしたか。有難うございます。それでは、そうさせて頂きま
す。
宜しくお願いします。」

更に今井が言った。

「黒瀬様をお願いしたのは、他にもう一つ理由があります」

「私が京都まで無事に着く事が出来て、お札を納める事が出来る
かとのご心配ですね」

「実は、そうです」

「私もそれは案じております。これらの方々が、都に戻るのを喜ば
ない
者も居るはずです。道々、どのような妨げをしてくるかも知れませ
ん」

黒瀬は神棚と床の間に置いてあるお札を見ながら話した。

「私は、その事を一番心配致しております。今、ここに居られる方
々は

我々の御先祖様方です。仲間です。それ故、我々や縁者に対しては、
たとえ怨霊と言へども、維盛様、六代様が付いておられる限り、
我々には害を為しません。しかし、この方々を妨げようとする者達
は違います。凄まじい怨念の力で黒瀬様の命までも取りに来るやも

知れません。源氏方の・・・」

今井が心配そうに言った。

「私も、それは感じております」

「黒瀬様もやはりそうでしたか。道々、何処で白い幟が立ちほだかるや

も知れません。今は我らの御先祖様方は皆様落ち着いて静かにされてお

られます。しかし、何らかの妨げでお札を納める事が出来なくなれば、

今度は収まりのつかない大変な事態に成りかねません」

「私もそれを案じております。今井様には、何らかの思案がお有りなのでしょうか」

「実は私の甥で、いざなぎ流の太夫がいます。その者を私と共に同行させて頂きたいのです」

いざなぎ流はその昔、高知の物部地区を中心に修験道・陰陽道などあらゆるものを集約し、独自に発展を遂げた、ある種の祈禱集団である。

いざなぎ流の太夫は自らを博士はかせと呼ぶのであった。元々は高度な知識を持った平家の落人が始めたとの説も有る。

「そうでしたか。願ってもない事です。ましてや一族の血筋の方であれば」

黒瀬が言った。

「それでは、これからその甥に連絡を取ります。黒瀬様には今日は十分

にお休み頂いて、出発は明朝と言つことにして下さい」

「それでは、お言葉に甘へ、そうさせて頂きます」

「甥には明朝、高知駅に来るように申し伝えておきます」

黒瀬は少し安心した。縁者のいざなぎ流の太夫に同行して貰えれば、こちらの力も倍以上にはなる。

「宜しく願います」

黒瀬はそう言つて、床に付いた。

さすがに疲れていたのか、直ぐに熟睡した。しかし、夢の中で白い幟を見た記憶が残った。

黒瀬が目を覚ましたのは昼もとくに過ぎた頃であつた。黒瀬は東京の事が気掛かりになり吉川に携帯で電話を試してみた。

「吉川君か。黒瀬だが。そちらはどうかね」

「上手く行きました。スタッフの三人は今日の朝、霊障も取れて全員回復

しました。投稿者からは未だ連絡が有りませんが、武田が確認を取るよう

にしています。有難うございました」

「それは良かった」

「先生が東京に戻られたら、武田が一席設けるとの事です。楽しみにしていて下さい」

「分かった。それでは東京に戻ったら、こちらから連絡をするよ」

「それと・・・」

「それと、なんだね」

「原稿の方も宜しく」

「分かったよ。それじゃ」

黒瀬は原稿の事を言われて、むっとして電話を切った。吉川は、昨晚からの出来事や、これから起こるであろう事などは知る由も無かった。

今井が黒瀬の声を聞いたようで、部屋の外から声を掛けた。

「黒瀬様。お目覚めですか。お部屋に入って宜しいでしょうか」

「構いません。どうぞ」

今井が部屋に入って来た。

「つい、寝過ぎてしまったようです。面目有りません」

「とんでもありません。十分に休養をお取り下さい。まだ、お疲れが取れないのではと心配いたしております」

「いや。もう大丈夫です」

「ところで、甥には先程連絡をしておきました。明日の午前十時に高知駅で待ち合わせをする事になりました」

「有難うございます。お二人にお供頂ければ、これ程心強いことは有りません」

「黒瀬様、お一人でも大丈夫とは思っております。しかし、何分根が深く

何が起るやも知れません。事が起きた時に黒瀬様のご負担を些かでも

軽く出来、お役に立てればと願う次第です」

「ご配慮感謝します。それでは今井様に怨霊除けの護符をお渡ししておきます。肌身離さずお持ちください」

「黒瀬様、有難うございます」

その9

翌朝、黒瀬は今井と共に高知駅に行った。高知駅で武田の友人の山崎に車を返してから、今井の甥を待つことにした。

「今井の叔父さん」

今井の甥であった。甥は予定より少し早めに到着した。

「久雄。この度は急な願いで悪かったな」

「いやあ、何の、叔父さんの頼みですから」

「黒瀬様。これが太夫をしている甥の徳広久雄です」

「徳広です。宜しく願います」

「黒瀬です。こちらこそ宜しく願います」

黒瀬は太夫と聞いていたので、もっと年配者かと想像していたが、以外にも三十を少し過ぎた好青年で驚いた。

「黒瀬様。午前十一時の特急で行けば、岡山から新幹線を乗り継いで京都には午後の三時前には着けます。私は切符を買って来ますので、その喫茶店で甥と待っていて下さい」

そう言って今井は切符を買いに行った。

黒瀬と徳広は喫茶店に入りテーブルに着いた。

「昨日、叔父から大体の事情は電話で聞きました。村では大変だったようです。私も以前から気にはなっていました。しかし、これあの村も落ち着くでしょう」

「正直、今回は大変重要な役割を背負い込んでしまったようです。予想外でした。これも神仏から架せられた役割、修行の一つと思っております」

「叔父から聞きました。黒瀬様のお力は並大抵のものではないとのこと」

「いや、まだまだです」

「徳広さんは何時から“いざなぎ流”の太夫の道に進まれたのですか」

「私の母、即ち今井清隆の妹が物部の太夫の家に嫁いで、生まれたのがこの私です。ですから、何時からと言う訳でなく子供の頃から見真似で今に至っています。普段は百姓をしています」

笑いながら徳弘が言った。

「そうでしたか。霊能者や修験道の行者などこの世界の者は血筋で引き

継いで行きますから。たとえ自分にその意志が無くても、先祖が蓄積

した力をどうしても受け継がざるを得ないのですよね」

「黒瀬様もそうでしたか」

「はい。私の四代前に行者がいたもので」

「やはり。この道は逃れる事は出来ないですね」

徳広が諦めた表情で言った。

暫くして、今井が切符を買って戻ってきた。

「切符は買いました。まだ少し時間がありますので、まだゆっくりして下さい」

「黒瀬様。昨日叔父から電話を貰って、祭壇でお伺いを立ててみたのですが、

白い幟が京都の周辺に集まり始めているようで・・・」

「やはり、そうでしたか。白い幟は私も見たような気がしていました。た。

源氏の亡霊、怨霊すかな。我々にお札を納めさせたくないのでしょう。

これから、一波乱も二波乱も有るかもしれませんな。多勢で来られると、

怨霊除けのお札を持っても大丈夫とは限りませんから。何らかの策を

早急に考えなければ」

「今回は、八坂神社、三十三間堂、鞍馬寺でしたね」

徳広が訊いた。

「そうです。今日は八坂神社に行き、明日は三十三間堂と鞍馬寺に

行こうか

と考えています。事が順調に行けばですが」

「何故、鞍馬寺なのでしょうかね」

徳広が気になる事を言った。

「鞍馬寺には三十三間堂と同じく千手観世音菩薩様が祀られています。」

御先祖、いや六代様が都を一望しながら大慈大悲の千手観世音菩薩様の

庇護の下で平家一門を供養する事が出来るからではと思っていますが」

「鞍馬寺には別に理由が有るのではないのでしょうか。千手観世音菩薩様の

庇護を得るのですしたら三十三間堂だけでも良いのではないと思いますが」

「徳広さん。それも一理ですな。道々考えてみましょう」

「それでは、そろそろ行きますか」

今井が出発を促したので、三人は改札に向かった。

その10

黒瀬は列車に乗ってから徳広が最後に言った言葉が気になっていた。

鞍馬寺は黒瀬も行者の修行で何度か訪れた事の有る寺でもある。

鞍馬寺のご本尊は鞍馬山尊天であり、大聖毘沙門天王、

大慈大悲千手観世音菩薩、破邪はじやけんしやう顕正護法魔王尊が三身一体

となったご本尊である。そして、義経が預けられて修行をした寺でもあり、

義経とは縁が深い。鞍馬寺には義経の供養塔も有る。

清盛は義経の命を助け、幼少の折には我が子と同じように可愛っていた。

後に義経は源氏として平家と戦ったが、その後は、頼朝の命で非業な最後を

遂げ、静御前に宿した子までも頼朝の命で生まれて間もなく由比ヶ浜に沈め

られている。義経の頼朝への怨念、即ち源氏に対する恨みは平家と同じく強

いはずである。義経の怨念の力を借りるのか。然れば、京都では義経と縁の

深い鞍馬寺ご本尊の守護の下で義経を先導役として大事を成就する事か。

義経が睨みを利かせれば、源氏の亡霊も迂闊に我々には手を出せない。

黒瀬に閃いた。それと同時に、南無破邪顕正護法魔王尊と南無九郎判官義経

の文字が一瞬見えた。

「やはり」黒瀬は思った。

「見えましたか」

横にいる徳広が黒瀬に言った。

「確かに見ました」

黒瀬と徳広も同じ物を見たのであった。

「この大事の成就には、義経を先導役とするように、との知らせのようですな。」

白い幟の怨霊の妨げを防ぐには、義経ですか・・・」

黒瀬が言った。

「私も、そう感じました。それで、昨日、白い幟が見えた時に鞍馬寺の事がずっと気になっていました」

徳広が言った。

「徳広さん。それではこのように致しましょう。岡山で新幹線に乗り換えて、

神戸付近を通過した頃から、南無九郎判官義経を念じて、鞍馬山尊天秘密真言

を小声で唱え続けて下さい。鞍馬山尊天秘密真言はこの紙に書いたとおりです。

京都駅に着くまでに、何らかの知らせが有るかもしれません」

黒瀬は鞍馬山尊天秘密真言を書いた紙を徳広に渡し伝授した。

それには、

オンバサラ・ダルマキリ・ベイシラマナヤ・ダルマハラ・マソバミ
ウンソワカ

と書かれていた。

「分かりました。念じ、唱え続けましょう」

「徳広さん。もし義経の霊が先導役になってくれるのであれば、これで白い幟の

怨霊で閉ざされた道は徐々に開いてゆく筈です。関門は京都駅と八坂神社、

明日の三十三間堂そして鞍馬寺の四ヶ所と思われます」

「今井様はお札を手元から離さずに持っていて下さい」

「分かりました。我が命に変えてもこれらのお札はお守りいたします。

決して我が身から離しません」

三人は岡山で新幹線に乗換えた。

果たして義経の頼朝への怨念が我々に味方してくれるのか、黒瀬には不安が残った。

いくら頼朝に対して怨念が有るにしても義経は源氏である。源氏が平家に手を貸すのか。

岡山から京都迄は一時間足らずで到着する。急がないと時間が無い。黒瀬と徳広は半眼にして瞑想を始めた。

京都駅の周辺は既に白い幟を立てた源氏の郎等どもの怨霊が取り囲んでいるのが見え、

八坂神社と三十三間堂の周辺にも集まり始めているようであった。

鞍馬寺だけはなぜ

か静かであった。源氏の怨霊は、我々が鞍馬まで行き着く事が出来ないで安心していいのか。

神戸を過ぎた頃、徳広は黒瀬から言われたように、南無九郎判官義経を念じ、

鞍馬山尊天秘密真言を小声で唱え始めた。

それと同じくして黒瀬は九字を素早く切り、素戔嗚尊を念じ、身滌大祓を唱えた

後に疫神祓を唱えた。新大阪を過ぎた頃に、黒瀬と徳広に若武者とその横に幼子

を抱いた女人の姿が微かに見えた。京都駅の北に面した通りに立ち、こちらを招

いている様子であった。その二人の姿が立っている所だけが白い幟を持った怨霊

の姿が途切れていた。義経と静御前か。黒瀬と徳広は思った。

その11

京都駅に到着し、三人は新幹線を降りた。途端に強い妖気、鋭い視線と

殺気が覆い被さってきた。それでも三人は北口の通りを目指して歩き始めた。

重い荷物を背負わされたようで、一步一步歩く足が重く感じられ、思うよう

に進めなかった。高齢の今井にとっては、尚更苦痛のようであった。

「叔父さん、大丈夫ですか」

徳広が今井を気遣った。

「何だか、体が急に重くなったようで、歩き辛いです」

「もう少し頑張って下さい」

黒瀬が今井に言った。

三人は、やっとの事で北口の通りに出ることが出来た。妖気と殺気が更に強

く感じられ、無数の白い幟が風に靡く音が聞こえるかのようであった。しかし、

それ以上の現象は起こらなかった。

三人は通りでタクシーに乗り四条通りの祇園に向かった。この時期、底冷え

のする京都にも関わらず今井は汗をかき車の中でグッタリとしてい

た。

徳広は念じ、唱へ続けた。黒瀬も素戔嗚尊を念じていた。

八坂神社の石段の前に立つと、周りは人目には普段と変らぬ光景であつたが、

黒瀬と徳広は、血腥く殺気立った異様さを感じ取っていた。白い幟もちらつ

いて見えた。多くの亡霊が集まり、三人の周りがざわついている。

石段を上

ろうとしても、前に壁が立ちはだかっているような感覚で足を踏み出せない。

これから境内に入れるのかと思った。すると、晴れているのに何故か一番下

の石段の中ほどに水滴が一つポツリと落ちた。次の段にも、その次の段にも、

そして最上段の西楼門の処まで続いた。

「あれは、若武者の横にいる女人が抱いている幼子から滴り落ちる水滴のようです」

徳広が言った。

黒瀬は、これは知らせかと思った。

「今は、信じてその水滴を辿って行くしか方法はないでしょう」

黒瀬がそう言つて、先頭となり、今井を間に入れ、徳広が後ろに付き、その水滴の跡を踏むようにして石段を上って行くと、楼門まで辿り着くことが出来、境内に入れた。

あれは、義経と静御前が我が子を海に沈めた頼朝への恨みかと、黒瀬と徳広は

思った。楼門から中には白い幟の亡霊もさすがに入って来る気配はなかった。

三人は直ぐさま本殿で祝詞を唱へ、素戔嗚尊の加護を願い、白い紙で包んだ

維高大明神のお札を境内の庭の隅に密かに埋めた。

徳広が穴を掘り、黒瀬が清めの塩を撒き、今井がお札を納め、更に黒瀬が清めの塩を撒き、

徳広がお神酒を振り掛け、三人で土を掛けた。埋め終わると、黒瀬と徳広が祝詞を上げた。

時が経つに連れ、埋めたお札が朽ちて自然に還る事により、怨念も消滅するであろうと思った。

黒瀬と徳広は素戔嗚尊の加護に感謝し再び本殿で祝詞を上げた。楼門から石段を見ると、

まだ先程の水滴の跡がくつきりと残っていた。三人は楼門を出て、元来た道をなぞりな

がら石段を下りた。徳広はその間も南無九郎判官義経を念じ、鞍馬山尊天秘密真言を小声

で唱えていた。

その12

その日は、三十三間堂の東に面したホテルに宿泊し、不測の事態に備え

て三人同じ部屋で寝る事にした。三人はレストランで食事をとりながら、

今日起こった事、明日起こるであろう事を考え話し合った。

「今井様。今日のご苦労様でした。食事が済みましたら、早くお休み下さい」

「何の、黒瀬様や甥に比べれば私は大した事はしておりません」

「そんな事は有りません。今井様がお札をお守りしておられるので、平家の郎等達は落ち着いているのです。だからこそ、維高大明神のお札も八坂神社の境内に埋める事が出来たのです」

「黒瀬様、あの若武者と幼子を抱いた女人の姿は義経と静御前ですかね」

徳広が訊いた。

「私は、そうだと思います。だから白い幟の亡霊も我々に手を出せずに、

義経の言うがままに道を開けたのだよ」

「私には何も見えませんでしたがお手伝い頂いたのでしょう。これも清盛様の生前の情けが有ったの事と感謝致しております」

今井が二人に言った。

「義経自身、兄と慕った頼朝に追い込まれ、我が子までも海に沈められた恨み、怨念は相当なもののようにすな」

黒瀬が言った。

「いくら戦国の乱世と雖も、頼朝は自分の身内すら信じる事が出来ずにいた

哀れな人物です。頼朝が幼少の折に命を助けられたのも清盛様が人の哀れを

知り、情けが有ったからこそです」

今井は更に続けた。

「清盛様は何時も遠くを見据えられて、国の繁栄を考えられておられました。

広く外国との交易を薦めようとされ、大輪田泊、今の神戸にその為の港を作

られ、福原に都を移されようとされた。あの時代に於いては先を見通された

偉大な政治家じゃ。確かに平家一門にも驕りが有ったかも知れぬ。

しかし、

平家が滅びる事により日本の進歩は何百年も遅れた事は確かな事です。

清盛様のお考えが正しかった事は、今の時代、神戸が日本の大事な貿易港

の一つである事で分かります。源氏には到底真似の出来ぬ事」

「清盛様が病にならずに、もう少し長生きされておられれば、

平家も違つたでしような」

黒瀬が言つと、

「いやいや、年寄りの戯言です」

「今井様に前から伺いしたい事がありました」

「何でしょうか」

「維盛、六代親子の事です」

「黒瀬様。それ以上はお訊きにならない方が良いでしょう」

今井が質問の内容を予測したかのように言った。

「そうですか」

「何をお訊きになりたいか、察しは付きます。しかし、何百年も前の事で、

先祖代々の釣書も数度の火災で焼失し、元々から有った先祖宮も山津波で

流されてしまっています。何ら残ってはおりません。ただ残されているのは、

平家と言う血筋だけです」

「良く分かりました」

黒瀬はそれ以上訊かなかった。

「明日は、三十三間堂と鞍馬寺です。我々を妨げる為に怨霊どもは益々数を増して来るでしょう。例え義経が見方してくれるにしても、多勢に無勢。油断は禁物です」

黒瀬が注意を促した。

「黒瀬様。神仏のご守護があります。それ故、今日は神社の境内にお札を埋める事も叶いました。石段の手前で一時はどうなるかと思いましたが、お蔭様で境内に入ることも出来ました。これもご守護が有ったからこそだと思います。誠に有難い事です」

今井が神妙な表情をして言った。

「確かにそうでした」

黒瀬が言った。しかし、見える者と見えない者との違いで、黒瀬には未だ不安が残っていた。これからは怨霊も必死で妨げを仕掛けてくるはず。

邪神の力を借りる事も有りうる。そうなれば、一瞬の隙が命取りにも成り兼ねない。

「徳広さん。徳広さんには明日の事は大体の予測が付いていると思います。宜しく願います」

「黒瀬さん。分かりました。こちらこそお願いします」

黒瀬は、徳広の持つ霊力、透視の力は並大抵のものではないと確信していた。今

回の事が無事に成就すれば、これが縁となり、先々この世界で信頼出来る人物

として関わりを持ち続ける、で有ろうと思った。

「黒瀬様。大分と周りが騒がしくなってきたようです。白い幟を立てた亡霊が

このホテルと三十三間堂を取り囲み始めている様です」

徳広が周りの気配を感じ取っていた。黒瀬も暫く目を半眼にし、様子を伺った。

「そのようすな。それも、かなりの数のようす。それではそろそろ部屋に

戻りましょうか」

部屋に戻ると、黒瀬は部屋の各隅に護符を置き、更に入口と窓に護符を貼り付けた。

「今井様。お疲れでしょう。先にお休み下さい。あとは私と徳広さんで

お守りさせていただきます」

「それでは先に休ませて頂きます。申し訳ありません。年は取りたくないものですな」

そう言つて今井は床に就いた。

「徳広さん。私達もそろそろ休みますか」

「そうですね。明日も大事が控えていますから」

黒瀬は九字を切り、大日如来の結界法を行い、念珠を枕元に置いて床に就いた。

徳広も護身法を行い床に就いた。部屋の明かりは点けたままにしていた。

午前二時頃、窓の外が騒がしく感じられ、黒瀬と徳広が目覚めた。

午前二時は即ち丑の刻。丑寅の間の時刻は怨霊、亡霊、不成仏霊など

騒ぎやすい時間帯である。二人が窓をみると真っ白く、何も見えない状態

になっていた。よく見ると、白い幟が何枚も重なって窓の外に張り付いて

いた。その後ろには怒号のような声も聞こえた。白くなった窓には、刀を振りかざし、凄まじい形相の武者どもの姿も見え、今にも部屋に入り、

斬りかかってきそうな様子であった。

黒瀬が心配して今井を見ると、何も気付いていない様子で深い眠りに入っ

ていた。黒瀬と徳広にだけ見え、聞こえていた。

「徳広さん。彼らは護符と結界で、この部屋には入って来れません」

「そのようです。威嚇しているのですが、でも往生際の悪い連中ですね。」

「明日に些か不安が残ります」

徳広が心配そうに言った。

黒瀬は千手観世音菩薩を念じ、大悲心陀羅尼を七回上げた。そして、千手観世音菩薩の左手に持つ宝剣と宝弓、右手に持つ宝箭ほうせんを暫し貸し賜へと願い、千手観世音菩薩の御真言を百八回唱へた。

オンバサラ・ダルマキリク・ソワカ

[illegible]

御真言を唱え終わつた瞬間、武者の亡霊の姿が消え、窓に張り付いていた

無数の白い幟も一枚ずつ剥がれるかのようにして、消えていった。

窓の向

こうには輝き、光を放つ三十三間堂の屋根が見へた。黒瀬と徳広は千手観世音菩薩の守護に感謝し、再び眠りについた。

明日、無事に事が運べば良いが、と黒瀬の脳裏にも不安が走った。

その13

午前六時過ぎ、黒瀬と徳広が殆ど同時に目を覚ました。今井は既に起きていて、
出発の準備を済ませていた。

「今井様、おはようございます。昨晚は良く眠れましたか」

「お蔭様で良く眠れました。でも年寄りには朝が早くていきませんな。五時にはもう目が覚めてしまいました」

「叔父さん、良く眠れて良かったですね」

徳広が言つて、黒瀬と顔を見合わせた。

今井は夜中の出来事には全く気付いていなかった。

外は寒く、三人の吐く息で窓が曇り外が良く見えなかったが、三十三間堂の屋根の輪郭が望めた。

徳広が窓を見て、黒瀬に言った。

「黒瀬様。窓に字のような物が」

黒瀬がよく見ると、息で曇ったガラスを指でなぞったように書かれていた。

鞍馬寺にて我が嫡男の供養を願いたし

九郎、静

やはり、義経と静御前か！

三人、はこれを見て感極まった。

外が明るくなり、日が当たり始めると、息で曇っていた窓の表面の文字が水滴と共に徐々に消えて行つた。

「我が子を思う親の気持ちは昔も今も変わりませんな。切ない事です」

今井が言つた。

黒瀬は字の書かれていた窓に向かって南無九郎判官義経と二十一回唱へ、

一切引き受けた旨を伝へ、般若心経、妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五、

妙法蓮華経陀羅品第二十六、そして最後に大悲心陀羅尼を上げた。

三人は朝食を済ませ、三十三間堂に向かった。

昨日と同じように、黒瀬が先頭に立ち、間にお札を持った今井、後ろに徳広が

続いて歩いた。徳広は南無九郎判官義経を念じ、鞍馬山尊天秘密真言を小声で

唱え続けた。黒瀬もこれからの大事の成就を願い、大悲心陀羅尼をあげた後、

千手観世音菩薩の御真言を唱えながら歩いた。

強い視線、妖気、殺気は昨日と同じに感じていた。しかし、それ以上の妨げは

無いようにも思えた。三十三間堂の門を入ろうとした時に黒瀬と徳

広には赤子

のむずかる声が微かに聞こえた。

「義経殿……」黒瀬は心の中で言った。

境内に入り、門主の計らいでお札を無事に納める事が出来た。

黒瀬と徳広はご本尊の前で経文を上げ、平家一門の供養を行い、千手観世音菩薩のご守護に感謝した。

残るは鞍馬寺だけであつた。これで全ては成就する。最早、白い幟の亡霊ども

の妨げは無いのであろうか。このまま鞍馬寺に順調に行けるのか、と黒瀬は

自分自身に問うた。

三人は七條通りからタクシーで出町柳まで行き叡山電鉄鞍馬線で鞍馬まで

行く事にした。

出町柳で電車に乗り鞍馬に近付くにつれて安堵感が満ち溢れてきた。黒瀬もこれで責任が果たせると思っていた。しかし、電車が岩倉駅に着いた頃、今井の様子が普通でないのに徳広が気付いた。

「叔父さん、どうしました」

「気分が悪くて……」

「乗り物酔いですか」

徳広が更に訊いた。

「頭が割れるように痛く、吐き気がして、それに体全体が焼けるように熱い」

「護符はどうしました」

黒瀬が心配して訊いた。

「さつきから探しているのですが、見当たりません。どうも三十三間堂で鞆からお札を取り出した時に落としてしまったようで」

黒瀬は今井の顔を見た。すると、今井の顔には何人もの髪を振り乱し、

傷だらけの血に染まった武者の顔が幾重にも重なり浮かび上がってきた。

さらに、両目の瞳の中に白い幟が翻っていた。

「しまった！」

と黒瀬は思った。護符を落とした隙に今井の目から怨霊に入り込まれてし

まったのであった。目から頭の中に入り込まれると、技に長けた行者や

霊能者でも抜き取るのは至難の業であった。

程無く電車は鞍馬駅に到着し、暫く駅のベンチで今井を休ませる事にした。

今井は苦しみで唸り、まともに言葉を発する事が出来ない状態にまでなっていた。

「油断していました。申し訳ありません」

徳広が詫びた。

「徳広さん。誰の落度でもありません」

「黒瀬さん。私がここで叔父を看ていますので、鞍馬寺にはお一人でお札を納めに行つて頂けますか。それで事は成就します」

「いや。それは出来ない。お札は今井様自らの手で納めて頂かなければ

なりません。それより怨霊を早く抜き取らなければ命に関わります」

「直ぐそこが鞍馬寺なのですが・・・」

徳広が悔しそうな顔をした。

「護摩焚をしてから滝に打たれるのが良いのですが、今の状況とお年からして

無理な事です。別の方法を考えましょう。とにかく徳広さんは南無九郎判官義経

を念じ、鞍馬山尊天秘密真言を唱え続けていて下さい。この隙を見て、怨霊どもが仕掛けて来るかも知れません」

「分かりました。叔父の事、宜しく願います」

黒瀬は考え続けた。しかし咄嗟の事で頭の中が混乱し、考えが纏ま

らなかつた。

黒瀬は心を落着かせる為に、体の力を抜き無心になり、念珠を繰りながら

不動明王の中咒を唱え始めた。

ノウマク・サンマンド・バサラダン・センダマカロシャダヤ・ソワタヤ・ウンタラタ・カンマン

[illegible]

中咒を唱え始めて念珠が一回り終えた頃に、那智熊野で修験道の修行をした

仲間で、今は京都の向日市で寺の住職をしている者が居るのを思い出した。

それも平家の末裔と聞いていた。

「そうだ！彼のところは密教寺院で護摩壇も有る」

黒瀬は携帯で直ぐに電話をした。

「龍岩寺さんですか」

「そうですか」

「東京の黒瀬と申しますが、山本雲斎さんはご在宅でしょうか」

「東京の黒瀬様ですね。暫くお待ち下さい」

「もしもし、山本です。黒瀬さん、お久しぶりです」

「山本さん。こちらこそ、ご無沙汰いたしております。実は・・・」

黒瀬は今までの状況を詳しく説明し、山本に協力を頼んだ。

「黒瀬さん。分かりました。私の力の及ぶ範囲で出来るだけの事はさせて頂きます」

「山本さん。有難うございます」

「それでは直ぐに車で迎えに行きますので、鞍馬駅で待っていて下さい」

「いや、電車で一本ですので、私達は出町柳まで戻ります。

ご足労掛けますが、出町柳まで来て頂ければ・・・」

「そうですね。その方がお互い、早いかもしれません」

黒瀬はこれで何とか今井を助ける事が出来るかもしれないと思った。徳広に向日市の寺に行く旨を話し、出町柳まで戻る事にした。黒瀬と徳広

でグツタリしている今井を抱えながら電車に乗り込んだ。

黒瀬は出町柳に着くまで、念珠を今井の額に当て不動明王火界咒を唱え続けた。

しかし、黒瀬はこれが唯の気休めでしかない事は重々承知していた。黒瀬と徳広だけが車内に充満した血腥い匂いと妖気を感じていた。

その14

出町柳に着き、改札を出た所で待っていると、直ぐに山本の車が到着した。

作務衣を着て首に大粒の水晶の念珠を掛けた格好で、自ら車を運転してきた。

既に、護法をしているのであろう、少し顔つきが普段よりはきつく感じられた。

「黒瀬さん。お久しぶりです」

「山本さん。ご厄介をお掛けします」

黒瀬は今井と徳広を手短に紹介し、山本の車に乗り込んだ。

「大分と臭いますね。かなりの数の怨霊のようですね」

山本が言った。

「ご推察の通りです。油断していました」

黒瀬が言った。

「黒瀬さんもご存知のように、目から頭に入られた怨霊を抜くのは至難の

技です。弟子に準備させております。寺に着きましたら、直ぐに護摩焚き

を始めましょう」

「有難うございます」

黒瀬と徳広が礼を言った。

「護摩焚きの後、ご本人には酷かも知れませんが水は被って頂く必要があります。井戸端で少なくとも桶に二十一杯は・・・」

「私もそう思います。護摩焚きの後に滝で打たれるのが一番なのですが・・・」

黒瀬が残念そうに言った。

「黒瀬さん。お互い神仏に仕える身。これも人助け、修行ですか」

「そうですね。山本さん」

車が寺に着くと、山本は弟子を呼び今井を本堂まで連れて行かせ、

ご本尊

である不動明王の前に座らせた。黒瀬と徳広も本堂まで行き、山本が法衣

に着替える間、寺のご本尊に仏説聖不動経を上げ、真言を唱えて加護を

願った。法衣に着替えた山本が本堂に来て、宗派の正式作法に則って護摩壇の前に座り、印を組み、九字を切り、更に印を組み、読経を上げ、護摩壇に火を放った。

山本も真言は不動明王火界咒を唱えた。

今井はご本尊の前に座り、肩を落としてぐったりしていた。弟子が気を

利かせて座椅子を持ってきて今井を座らせた。黒瀬と徳広は山本の両脇に座り、共に不動明王火界咒を唱え続けた。護摩木を焼べ続け二時間程した頃、護摩壇の炎が勢いよく上がり不動明王の姿になったかのように見えた。その瞬間、山本は前に置いてあつた宝剣を抜いて今井の両肩と頭に軽く当てた。そして、弟子に命じ、今井を下穿きだけにさせて、井戸端まで抱えて行かせた。

山本は井戸端で九字を切り、龍神の御真言を三回ずつ唱えながら、今井の頭から桶で二十一杯水を掛けた。

オンソラソバティエイソワカ
オンソラソバティエイソワカ
・・・・・・・・・・・・・・・・

水を掛け終わると、再び宝剣を抜いて、今井の頭から肩にかけて、不動明王火界咒を唱えながら軽く叩き始めた。すると今井の頭の上部から白い煙のようなものが出て行くのが見え、山本は素早く白い煙に向かって九字を切った。

「抜けました」

山本がもう大丈夫だと言う顔をした。

弟子が今井を直ぐさま抱え風呂場に行き、体を温めさせた後、客間に用意された床に寝かせた。

「山本さん。有難うございました。お蔭で助かりました」

黒瀬が礼を言った。

「山本さん。本当に有難うございました。叔父に成り代はり、お礼を言わせて頂きます」

徳広も礼を言った。

「いや、何の。護摩焚きの間はしぶとく抵抗して来ましたが、さすが宝剣を抜くと観念したようです」

「山本さんの力は相変わらずですな。いや、以前より更に研ぎ澄まされて強くなっています。あらためて感服させられました。修行を怠り無く続けておられるようですな」

黒瀬が山本の力に感心した。

「僧籍にある身。生臭ですが、一応はプロですから」

山本は笑いながら言った。

「私などは、娑婆にどっぷり浸かっていますので、山本さんの力には到底及びもしません」

「いや。いざとなれば黒瀬さんの力は大したものです。那智熊野ではよく拝見させて頂きました」

「私などは、作家との二束の草鞋で中途半端でいけません」

「黒瀬さん。謙遜なざる事はありません。ところで、ご本人が体力を回復されるにはもう少し時間が必要と思います。今日は黒瀬さんと徳広さんも一緒にこの寺で泊まっていて下さい。久しぶりに一杯やりましょう。明日は愚僧が車でお送りいたします」

「有難うございます。それでは、お言葉に甘えて、そうさせて頂きます」

三人は山本の寺に一晚泊してもらった事にした。

黒瀬と徳広は今井の休んでいる部屋に様子を見に行った。少し、ふらつくようであったが意識はハッキリとしていた。

「叔父さん。お加減は如何ですか」

「もう大丈夫です。私の不注意で皆様方には大変ご迷惑をお掛けしました。申し訳有りません」

「何も気にされる事はありません。今日はこの寺でお休み下さい。鞍馬には明朝行く事にしました。この寺のご住職は私とは旧知の間柄です。ご心配は要りません」

「重ね重ね、有難うございます」

暫くすると、山本の弟子が今井の食事を運んで来た。そして、黒瀬と徳広に食事の支度が出来たので別室に来るようにと伝えた。

「今井様。それでは食事をされてから、ゆっくりお休み下さい。明日の大事の為に体力を回復させて下さい。私たちはこれから住職と一緒に食事を致します。何か有れば何時でも呼んで下さい」

黒瀬はそう言つて、徳広と別室に行った。

別室では山本が既に座つて二人が来るのを待っていた。

「山本さん。今日は色々とお世話になりました。感謝致します」

黒瀬が再び山本に礼を言った。

「黒瀬さんと私の間柄です。何にも気になさらずに。遠慮も無用です。」

さあ、一杯やりましょう。どんどん呑んで、召し上がって下さい」

山本は黒瀬と徳広に酒を勧めた。山本は酒を呑みながら今日の一件を話し始めた。

「黒瀬さんから大体の事情はお伺いしておりましたが、今日の怨霊どもは

凄まじかったですな。命を取る勢いでしたからな。もう少し遅ければ、

あの方の命も持つて行かれてしまったでしょう。お不動様のお導きがあったのでしよう」

「そうだと思っております。あの時、鞍馬の駅で無心で不動明王の真言を

唱えました。すると、山本さんの事が頭に浮かび、電話させて頂いた次第です。これもお導きです。不動明王は修験道の行者にとっては、中心的存在ですから」

「正に、中央に大日大聖不動明王、化像界^{けそうかい}大日如来之浄土あり・・・

ですな。この寺のご本尊様も不動明王様ですが」

山本は微笑みながら黒瀬に話した。

「不動明王を念じ、不動明王に救われました。これもお教え、お導きです」

黒瀬は心から有り難いと思った。

「黒瀬さんと徳広さんはその道のプロで良くご存知でしょうが、京の町は平安の

昔から様々な怨霊が住んでいます。怨霊の町です。事と場合によっては、

それらの怨霊が新たな怨霊を京の町に呼び込みます。これから十分注意して下さい」

「ご忠告、有難うございます」

黒瀬が礼を言った。

「しかし、怨霊や亡霊が多い故に、我々のような者の役割も有るわけですが」

山本が笑いながら言った。

「先々、何処で予期せぬ力を持った怨霊や亡霊と出くわすかも知れません。

その時に備えて、普段からお勤めと修行は怠ってはいけませんな」

黒瀬が自分に言い聞かせるように言った。

「しかし、黒瀬さんは今回大変重要な役目をお引き受けなされたよ
うで」

「いやはや、最初は除霊だけと思っていましたが、意外な方向に進
んで

行きました。成り行きと言うか、神仏の御指示か、ご先祖の因縁か
は良

くは分かりませんが」

「でも、黒瀬さんは良い事をされておられます。羨ましいですな。
最近愚僧

などはこの寺にいと葬式とか法事ばかりで、正直退屈していたと
ころです。

あ、これは失礼な言い方でしたかな。酒の上の話でお許し下さい」

「いやいや。しかし、行者の世界は命懸けです。

何時、命を取られるかも知れません」

「黒瀬さん。それは大丈夫です。神仏のご守護が必ず有ります。
今日の事にしてもお不動様のお導きで、この寺に来る事になら
れた訳ですから」

「確かにそうだと思います。助かりました。いや、助けられました。
有難い事です」

「今日の怨霊は最早手出しは出来ません。完全に封じておきました。
しかし、寺の周りを飛び交っている別の怨霊もまだ多く居るよう
ですな。

寺は結界を張っておりますので安全ですが、明日からは、くれぐれも

注意を怠らないようにして下さい」

「山本さん。有難うございます。それはもう肝に銘じております」

その後、那智熊野での千日行の話や、徳広を交えて、いざなぎ流の話をし、夕食のひと時を過ごした。

その15

翌朝、黒瀬と徳広は本堂で、山本の朝の勤行に付き合い、ご本尊である不動明王に今日のご守護を願った。

今井はすっかり回復して、食欲も旺盛になっていた。

「昨日は、どうなるかと思いました。皆様のお陰で命拾いしました」
今井が皆に礼を言った。

「もう、大丈夫ですな」

山本が今井の顔色を診て言った。

「新しい護符をお渡ししておきますので、失くさない様に腹巻の中にでも入れておいて下さい」

黒瀬がそう言って、護符を今井に渡した。

「面目有りません」

今井が申し訳なさそうな顔をした。

「今日で事は成就します。しかし、妨げようとしている者がまだいます。油断無きようお願いします」

黒瀬が今井と徳広に更なる注意を促した。

「それではお送りしましょう」

山本が車庫に車を出しに行った。

黒瀬は九字を切り、自らと今井に護身法を行い、徳広も自ら護身法を行った。三人は山本の車に乗り再び京都に向かった。

「鞍馬までお送りします」

「いや、そこまでして頂かなくとも、私どもは何処か近くの駅迄乗せて行つて頂ければ」

黒瀬は申し訳なく思つた。

「いや。途中、何が起るかも知れません。鞍馬寺の山門の前までお送りします。既に、車の周りには怨霊が寄つて来ています」

「有難うございます。それではお言葉に甘え、そうさせて頂きます」

車を走らせ寺の敷地から出た瞬間、周りには白い幟を靡かせた血みどろ

の姿をした武者の亡霊が入れ替わり立ち代り車の中を覗き込んできた。

妖気を漂わせ、殺気立っていた。隙有らば、今にも刀で斬りかかって来そうな凄まじい形相をしていた。しかし、運転している山本は平気な素振りであった。車の後ろの席に座っている、徳弘は事の成就を願

い、既に南無九郎判官義経を念じ、鞍馬山尊天秘密真言を唱えていた。

「黒瀬さんはご存知でしょうが、鞍馬寺の山門入って暫く行つたところに由岐神社が有ります。鞍馬の火祭りで有名な神社です」

「はい。私も鞍馬寺は何度が参拝に来たことが有ります。由岐神社もその都度、お参りはさせて頂いております」

「拝殿を過ぎた直ぐ左に末社の冠者社かみつきやが有ります。

その御祭神は素戔鳴命です。ご挨拶して行かれたら良いでしょう」

「そうでしたか。迂闊でした。末社までは気が回りませんでした。

今回は是非お参りさせて頂きます」

「由岐神社の近くに義経供養塔も有ります」

「それは私も存じています。今回の事は義経様のお導きだとも思っております」

「そうでしたか」

車は京都市中を抜け、山間に入り、間もなくして鞍馬寺に到着するところまで来た。

車の周りにはまだ武者の怨霊が飛び交い、沢山の白い幟が靡いていた。黒瀬と徳広は、

鞍馬寺に着いてから、車から出て山門まで無事に辿り着けるのか、と思った。

すると、山本が口の中でもぞもぞと何らかの真言を小声で唱え始めた。黒瀬と

徳広には余りにも小声の為に真言を聞き取る事が出来なかった。

車が山門の前に到着した時であった。何処からともなく、烏天狗の一群が飛んできて、

武者の怨霊を蹴散らし、車から山門の入口まで道の両側に立ち警護

した。上空にも

数羽の烏天狗が飛び周りを警戒した。この光景に黒瀬と徳広は目を見張った。

山本は唯ニコニコしているだけであった。

「それではお気を付けて参拝してきて下さい。ご加護をお祈りしています」

山本が言った。

三人は山本に丁重に礼を述べ車から降り、黒瀬は山本にまたの再会を約した。

三人は烏天狗に守られた道を歩き山門まで向かった。

山本は三人が山門を潜り、無事に境内に入るまで見届けていた。三人が無事に

山門に入るなり、烏天狗の一群は一斉に飛び去った。

黒瀬には山本がどのような術を使ったかは分からなかったが、心の中で再び感謝した。

その16、17

黒瀬は境内に入り、これで大丈夫だと思った。しかし、用心に越したことはない。

先頭は黒瀬が歩き、間に今井、後ろに徳広が続いた。黒瀬はやつと辿り着けたと思った。

東京を出発してから数日しか経っていなかったが、ここまで来るのに、

何日も過ぎたかのように長く感じられた。

由岐神社に着き、祝詞を上げた後に、山本から教えられた末社の冠者社に参拝し、

素戔鳴命に今迄での加護に感謝し、平家の怨念消滅を祈念した。黒瀬には冠者社の

扉が開いたかのように見えた。

由岐神社から少し上った処に義経供養塔が有り、三人は供養塔の石段を上り塔の前

で義経が源氏の一族にも拘らず今回の大事に力添え頂いた事に対して感謝し、

供養の経文を上げた。経文を上げるにつれて、塔から後光が発せられ、石塔の球形

の部分の正面が、扉が開くように見えた。扉の中には小さく、白く輝いた人の形が

見え、礼をしたかのように見えた。その後、扉が閉まり元の球形の石に戻り、後光も消えた。

そして三人は本殿金堂に行き、南無六代妙覺自在天のお札を納め、

平家一門と義経

の嫡男の供養を始めた。経文を上げる間、ご本尊の前には赤い幟を立てた無数の

鎧兜の武者や郎党達の姿が見えた。経文を上げ終わると、それら武者や郎党達は

黒瀬、今井、徳広に向かい礼をして、本堂の奥に吸い込まれるようにして消えた。

その中には赤子を抱いた女人の姿も確かに有った。

今井の目には涙が溢れていた。

「有難い事です」

今井が一言言った。

三人は更に、奥の院に行き、魔王殿で同じく供養の経文を上げた。

今度は、

鎧兜の武者や郎等、子供を抱いた女人の姿を見る事はなかった。しかし、

本殿の扉の前には村の神社で見た同じ紫衣の僧侶の姿が現れ、礼をして

本殿の中に消えて行った。

これで全て終わったと思った。三人は感動と満足感で満ち溢れながら西門

の有る貴船に下って行き、貴船口から叡山鉄道に乗り、出町柳まで向かった。

西門を出てからは白い幟の亡霊も事が成就した後は一切の手出しをしてこな

くなった。姿を見る事もなく、妖気や殺気も感じなかった。それと

は逆に黒瀬

と徳広は魔王殿、西門、貴船口そして出町柳に戻る間じゅう、周りには香木を

焚き込めたような香ばしい薫が発ち込めているのを感じた。とても良い薫で

あった。この薫りは確かに極楽浄土の入口から漏れ出る薫である。

黒瀬と徳広はこれで皆が成仏出来ると感じた。

十七、

黒瀬は京都駅で今井と徳広を見送り、自分も東京行きの新幹線に乗った。

乗る前に買っておいた缶ビールを飲みながら、ここ数日の出来事を思い出していた。

疲れた。確かに疲れた。それでも成就の満足感に満ち溢っていた。今回も良い修行をさせて貰った事に感謝した。

久々に携帯電話のメールをチェックすると、原稿の督促ばかりで、たまき出版の吉川からのメールも有った。

「たまき出版の吉川です。武田から投稿者の症状も回復したとの確認の

連絡が有りました。色々お世話になり、有難うございました。お疲れのところ申し訳ありませんが、原稿の締め切りはとくに過ぎています。

早くお願いします」

投稿者の症状も戻って良かったと思った。しかし、何であいつが原稿の督促をするんだ。黒瀬は直ぐに現実に戻され、明日からの事を考える

憂鬱になってしまった。溜まった原稿だけはご真言を唱えても駄目か、と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6742d/>

霊能作家・黒瀬圓の事件簿、第一話、維高大明神の巻

2010年12月7日21時49分発行